
月ノ姫～眠れる記憶を呼び戻せ～

碧海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月ノ姫〜眠れる記憶を呼び戻せ〜

【Nコード】

N4820I

【作者名】

碧海

【あらすじ】

” 守ってくれるんでしょ？ ” ” 命に変えても君を守る ” ” 姫さんは俺が守っちゃる ” ある日突然自分が月姫であることを言われた来栖瑠奈。四季神と呼ばれる守護者の桜井龍、松沢祐輔、萩啓太。しかし、あとの1人が・・・月姫と四季神の運命は？？複雑に絡まった糸が少しずつほどこけていく。恋あり、戦ありの現代和風ファンタジー。

あなたも四季神に守ってもらいませんか？

1：始まりの日

「
…見つけた。」

空が赤く染まる中、一人の少女を見つめながらの男がつぶやいた。

「
あれが、月姫。」

…
…愛しい私の月姫。
…
…早く君の心臓を手に入れたい。」

男は口元に妖艶な笑みを浮かべていた。

2：始まりの日

……綺麗な夕日。

いつもより下校時刻が遅くなってしまった瑠奈は、目の前に見える赤く燃えている夕日を見つめながら帰っていた。

季節は蒸し暑かった夏から秋に変わろうとしており半袖だった制服も朝夕の冷え込みから長袖に変わった。

瑠奈が着ている制服は、紺色のスカートに上が白を基調としたセーラー服。

赤いリボンがシンプルなセーラー服の中でひときわ強調されていた。

瑠奈の長い髪は下ろされていて歩きたび風に揺れ、さらさらと泳いでいた。

「…こんばんは。」

突然後ろから声をかけられ驚いて振り返る瑠奈。

振り返った先には黒を基調とした服をまとっている男がいた。

辺りがオレンジ色に染まっている中、男の周りだけが暗い闇に包まれている。

瑠奈はそんな気配を感じていた。

3…始まりの日

……逃げなきゃ。

本能で危険だと察知した瑠奈は逃げようとしたが、男の力なのか恐怖からなのかわからないが、足を動かすことができなかった。

男から視線を外すこともできず、ただカタカタと震えて立っているだけだった。

「……逃げようしないで。」

……私は月姫の心臓を手に入れたいただけだから。」

そう言って男は口元に妖艶な笑みを浮かべた。

……月姫？

男の発した言葉に理解はできなかったが、危険なことに変わりない
と思った瑠奈は、自分に叱咤して走り出した。

「……逃げないで、月姫。」

君はこの運命から逃れることはできないのだから。」

走っても走っても追いかけてくる男から、瑠奈は必死に逃げていた。

「……無駄だよ。」

……君はこの運命から逃れることなどできないのだから。」

目を細めながら妖艶に笑っている男は、必死に走って逃げている瑠

奈をみて楽しそうだった。

4：始まりの日

どれくらい走ったのか分からない。

ここがどこなのかも分からない。

それぐらい必死だった瑠奈はふと後ろを振り返った。

しかし振り返った先には誰もいない。

安心した瑠奈はまた振り返って歩きだそうとした。

…だがその足はすぐに止まった。

「…びひ…っひ。」

瑠奈の目の前にはさっきの男が立っていたのだ。

「言っただろ。」

…君は運命から逃れることはできない。

…月姫の運命からはね。」

そう言って男は腰についている鞘から刀を抜き取った。

5：始まりの日

男の後ろで輝いている月が、その刀の刃を光らせていた。

恐怖から足に力が入らなくなった瑠奈は、その場にしゃがみ込んだ。

ゆっくりと近づいてくる男が持っている刀に、自分の運命を悟った。

男は瑠奈の目の前まで来ると刀をゆっくりと持ち上げた。

「…さようなら、月姫。」

男はそれだけ言いつと刀を振り下ろした。

…もう…だめだ。

瑠奈はそう思い目を強く閉じた。

――刹那。

――キーン――

金属同士がぶつかり合うような音がした。

6：始まりの日

いつまで経っても自分に襲って来ない痛みに気づいた瑠奈は、ゆっくりと目を開けた。

瑠奈の目に映ったのは、学ランを着た少年の後ろ姿だった。

少年は、刀を持ってさっきの男と瑠奈の間に、瑠奈を守るようにして立っていた。

どうやらさっきの金属音は、この少年が持っている刀とあの男の刀が擦れあった音のようだった。

「…貴様……何者だ！」

男は瑠奈の間に入ってきた少年に殺気を放った。

しかし少年はその殺気にビクともせず刀を構え直した。

その瞬間少年の腕から見えた腕輪に男が反応した。

「…それは……まさか！？…四季神！？」

少年が何者なのか悟ると、男はすぐにその少年と距離を置いた。

「おのれ！四季神め！
…必ず…必ず月姫を手に入れて見せるぞ！」

男はそう言っただけで闇の中に溶け込んで行っただけ。

男の姿が見えなくなった途端安心感からか瑠奈は意識を手放した。

この日を境に瑠奈の日常は大きく変わった。

『月姫』という運命によって。

7：始まりの日

……寒い。

目が覚めて肌寒さを感じた瑠奈は、布団から出たくないという気持ちを我慢して起き上がった。

瑠奈がいる部屋は和室で、襖を開けるとその目の前には、見事な日本庭園が広がっていた。

暦は師走を示し、吐く息も白くなっていた。

あの恐ろしい日から三か月近く時がたつが、時々夢に見るあの光景が、今でも恐ろしくてたまらない。

男の後ろに光る円く大きな月。

その光に照らされて輝く刀と、男の妖艶な口元。

その刀が自分のもとに振り下ろされる。

そして、現れた学ラン姿の少年。

今でも目を閉じれば、その光景が目の前で起こっているように感じて怖くなった瑠奈は、自分の体を抱きしめた。

8：始まりの日

「瑠奈…中に入りなよ。風邪ひくよ。」

ふわりと肩に上着をかけられた。

「ありがとう、龍。」

瑠奈は龍にかけてもらった上着を、肩から落ちないように端を握りしめた。

「また夢を見たのか？」

龍は心配そうに瑠奈を見つめていた。

「大丈夫。もう慣れたから。それに龍もいるしね。」

瑠奈はそう言っ て龍に笑顔に向けた。

龍はそんな瑠奈の笑顔に苦しそうな顔をした。

「龍…… そんな顔しないで。あたしは大丈夫だから。
だって… 龍が守ってくれるんですよ。」

瑠奈は照れながらも龍を見つめて言った。

そんな瑠奈の言葉に一瞬目を見開いた龍だが、すぐに

「… ああ。」

と言って瑠奈の頭を優しく撫でた。

瑠奈の人生は三か月前に動き出した。

あの月が輝く夜に。

9：始まりの日

運命が動き出したあの日。

意識を失った瑠奈が目覚めたのは、次の日の朝だった。

…眩しい。

障子の隙間から除く太陽の光に目が覚めた。

目が覚めて最初に見えたものは、天井の木目だった。

知らない場所なのに、なぜか恐怖心というものは感じなかった。

障子の外の世界が気になった瑠奈は、外を見てみようと思って布団から立ち上がろうとした。

体を起こした瑠奈は、ゆっくりと立ち上がった。

戸を開けてみると、目の前には立派な日本庭園。

まるで平安時代の立派なお屋敷だった。

周りを見渡せば池などもある。

……「ここは…どこ？」

全く見覚えのない場所に、瑠奈は呆然と立ち尽くしていた。

ここにいる理由も分からずにオロオロしていると、ふと何かの気配を感じた。

「……誰か…いるの？」

気配の感じるほうへ目を向けると、そこには誰もいない。

だがそこからは確かに気配を感じる。

10：始まりの日

「申し訳ありません。ただ今姿を見せます。」

突然声が聞こえてきた。

だが周りには人がいない。

一点を見つめていた瑠奈の先に、その声とともに優しそうな男が現れた。

「私は香林と申します。」

そう言って香林はゆっくりと頭を下げた。

現代とは全く違う格好をした香林を目の前にして、瑠奈は戸惑っていた。

そして一番気になることを尋ねた。

「……あなたは…人間ですか？」

瑠奈の言葉に香林は驚いたような顔をしたが、それは一瞬ですぐに笑顔になった。

「さすが瑠奈様。

…確かに私は人間ではありません。

…しかし瑠奈様の敵でもありません。」

香林の表情はさっきと同じ笑顔なのに、急にずっと雰囲気我真面目なものに変わった。

「私が話せるのはここまでです。

ご自分の運命を知りたいのであれば、私についてきてください。」

香林はそれだけ言うと、黙って瑠奈ににこにこことほほ笑んでいた。

11：始まりの日

『自分の運命』

もしそれを聞いた時の自分は、きっと今までみたいに暮らすことはできないだろう。

そう心の片隅で思っていた瑠奈は、香林の顔をまっすぐ見つめて言った。

「私は……今の状況を全く出来てない。

…自分の身に何が起こっているのか知りたい。」

瑠奈の言葉を聞いた香林は、先ほどと変わらない笑顔で、瑠奈に自分についてくるように促した。

香林について行きながら、瑠奈はこれからの自分の運命を聞く覚悟をしていた。

香林について行くと、一歩ずつ足を進めて行くと、気配が多くなっていくのを感じた。

突然香林が足を止めた。

香林が止まったのは、一番気配が多い部屋だった。

「こちらです。」

そう言って香林は扉を開けた。

扉を開けた先には老人と、香林と同じ気配がする者が3人いた。

12：始まりの日

「お目が覚めたようで安心しました。

さあこちらへお座りください。」

部屋の真ん中に座っている老人は、瑠奈に優しく微笑みながら座るように言った。

瑠奈は言われた通り老人の前に座った。

瑠奈の左側には3人がいた。

様々な視線を感じながらも、瑠奈は老人に尋ねた。

「…あなたは…私の運命を知ってるんですか？」

…私の身に……今何が起こっているんですか？」

瑠奈の言葉に老人は目を閉じ、そしてゆっくりと開いた。

その視線はまっすぐ瑠奈に向けられていた。

「落ち着いてください。」

まずは私たちの自己紹介をさせてください。」

老人の言葉に瑠奈は首を縦に振った。

確かに相手の名前を知らない、どう呼べばいいのかわからず困ってしまう。

13：始まりの日

「私はこの屋敷の主。」

桜井秀一さくへいしゅういちと申します。」

…秀一さんってなんかオーラがすごい。

…若いときはモテただろうなあ。

瑠奈は秀一の自己紹介のとき、そんなことを思っていた。

確かに秀一は今、60歳を越えたおじいちゃんだが、若いときは美少年だった面影があり、凛々しい顔立ちをしている。

「そして次は

香林こうりん。

香蘭こうらん。

珠李しゆり。

天磨てんまです。

4人とも私の式として、いろいろ助けてくれます。」

「…………式…？」

秀一の言った単語の意味が分からず瑠奈は首を傾げた。

「瑠奈様は陰陽師を知ってますかな？」

秀一が尋ねたことに瑠奈は首を縦にふった。

陰陽師はこの前の日本史で少しだけ習った。

「代々桜井家は陰陽師をしておるのです。」

そして桜井家に仕えているのが、彼ら式なのです。」

秀一は4人をぐりと見回した。

14：始まりの日

「…先ほど自己紹介致しましたが…私は香林。
よろしく願いいたします。」

そう言って香林は頭を下げた。

香林はずっと笑顔でいるからとても落ち着く。

見た目も20歳前半ぐらいで、しっかり者のお兄さんって感じた。

「次、俺だな。…俺は香蘭。」

香林の弟だ！よろしくな。」

香蘭はそう言って、瑠奈にかわいらしい笑顔を向けた。

弟というだけあって顔立ちは似ているが香蘭はまだまだ幼さが残っていた。

見た目も高校生ぐらいで、瑠奈と変わらなかった。

「私は珠李と申します。

お困りのさいは、同じ女としていろいろお申し付けください。」

珠李は天女かと思うほどの美人だった。

優しそうな雰囲気には艶やかさがあって、お姉さんって感じだった。

15：始まりの日

「天磨だ。……」

…無口。

腕を組んで壁に寄り掛かっている天磨は、名前だけを告げると黙ってしまった。

「まったく……すみませんのお。」

天磨の態度に秀一はため息をつき、苦笑を交えながら瑠奈に謝った。

「…いえ。」

瑠奈は軽く返事をした。

「それではまず昔話からいたしましょうか。」

秀一はそう言ってゆっくりと語りだした。

いよいよ真実を知るときがきた。

長い長い昔話の始まりだった。

1：春の四季神

— 今から約1300年前 —

時は平安。

貴族の時代から存在していた桜井家は、闇の世界である仕事をしていた。

その仕事とは、『四季神^{しきがみ}』。

四季神とはその名の通り、春夏秋冬の力を使える者達のことだった。

桜井家はその内の一つ、『春』の力を持つ者が生まれる家系だった。

四季神の役割とは、『月姫^{つきひめ}』の守護者として月姫を守ること。

『月姫』とは、月の力を持って生まれてくる者だった。

月姫の持つ力は、強大で妖魔をおびき寄せた。

その力を欲しがり月姫の命を狙う妖魔は多かった。

どこに産まれてくるかも分からない月姫は、常に危険にさらされていた。

そんな月姫を守るために誕生したのが、『四季神』。

昔から月姫が誕生するたびに、四人の四季神も共に産まれてきた。

2：春の四季神

最初の月姫が死んでからも、数百年に一度、月姫と四季神は現れた。

そのたびに妖魔との戦いが繰り返されてきた。

『月姫』と『四季神』。

あの男が言っていたのはこのことだったのかと、ようやく瑠奈は理解ができた。

瑠奈がようやく頭の中を整理できたとき、再び秀一の口が開いた。

「…そして…今再び月姫は現れた。
…それが…あなたです…瑠奈様。」

「えっ……。」

瑠奈は動揺を隠せずにいた。

「嘘ですよ。」

私が月姫なんて……だって……あたしは平凡な女子高生です。

そんな力を持つてるなんて……実感ないし……。」

その言葉は瑠奈が自分自身を落ち着かせるために言っているものだった。

瑠奈が戸惑っていると、バタバタと廊下を走る音がした。

3：春の四季神

「香林！！来栖はここにいるか！？」

そう言って勢いよく少年が入ってきた。

「これ！！龍！瑠奈様の前で無礼だぞ！」

秀一は少年に向かって叫んだ。

「悪い。来栖：目が覚めたんだな。：よかった。」

その少年は瑠奈に向かって笑った。

「…えっと……。」

瑠奈は知らない少年が、自分に向かって笑っているのを見て戸惑っていた。

「龍様。…瑠奈様が戸惑っておりますわ。」

まずは座って…自己紹介でもされたらどうですか？」

瑠奈の様子を見かねた珠李が、助け舟を出してくれた。

「ごめん、ごめん。」

来栖…俺のことわからないよな。

じゃあ…まずはおれの自己紹介だな。」

そう言って龍は瑠奈の右斜め前に座った。

4：春の四季神

「俺は桜井龍^{さくらいりゅう}。」

ここにいる桜井秀一の孫だよ。」

龍は秀一を軽く見て、また瑠奈に向きなあった。

「そして…君と同じ星花^{せいか}高校の1年だよ。」

来栖瑠奈^{くるいるな}さん。」

「えっ……。」

瑠奈は龍が言ったことに驚いた。

「覚えてない？一応…同じクラスだけど…。」

って、言っても…俺学校と雰囲気違うからなあ…。」

龍はそう言って苦笑した。

5：春の四季神

「同じ…クラス…桜井君…あっ！」

瑠奈は思い出した。

しかし一つ気になることがあった。

「桜井君って…今と全然違うよね。」

だって…眼鏡かけてるし…それに…雰囲気も違う。」

「やっと思い出してくれたんだ。」

そう言って龍は嬉しそうに笑った。

「君の言っている通り…学校の俺と今の俺は違う。

学校ではまじめな桜井龍。

…でも…普段は違うんだ。

今の俺が…本当の自分なんだ。」

少し俯きながら龍は言った。

6：春の四季神

「どうして…。」

「いろいろ…事情があつてね。」

龍はそう言つて、秀一に目を向けた。

学校での龍は、いつも自分の席で本を読んでいる、大人しい子だった。

人を寄せ付けず、いつも一人でいたから。

ただのクラスメイト。

その程度だった。

もちろん喋ったことは一度もない。

そんな彼が今…目の前にいる。

いつもは眼鏡をかけていて、長い前髪で顔を隠してあるのに、今は眼鏡をはずし、前髪を横になびかせ、軽く分け目がある。

端正な顔立ちをしていて、きつと素顔のままで学校に行っていたら、もてただろうに・・・と思った。

7：春の四季神

「…瑠奈様。」

龍が話し終えたあと、秀一が口を開いた。

「あなたには…覚悟をしていただきたい。」

秀一は真剣な目をしていた。

「…かく…ご……?」

瑠奈は分からなかった。

「月姫の力によって…これから巻き込まれる運命を…。」

突然言われたこと。

頭の中に浮かんだものは昨日の夕方のことだった。

「……………んない。」

瑠奈は小さな声で呟いた。

「……………わかんないよ……………」

瑠奈は俯いた。

8：春の四季神

「さつき月姫とか四季神のこと聞いたばかりなのに……わかんないよ。」

「……わかんない。」

瑠奈は困惑していて、自分がどうすればいいのか分からなくなっていた。

瑠奈は泣きそうで、俯いてしまった。

「……私は……死ぬの？」

妖魔に殺されるの？」

瑠奈はただ俯いて、涙を堪えるだけだった。

そんな瑠奈の頬に、誰かの温かい手が触れた。

俯く瑠奈の頬に手を添えたのは・・龍だった。

「その様子だと…じい様に話…聞いたんだな。

じい様言っ てなかった？

月姫を守るために四季神がいるって。

そして桜井家は春の四季神が生まれる家系だって…」

龍は瑠奈を安心させるために、優しく言った。

「俺は…桜井家の次期当主だ。

そして春の四季神。

俺は月姫……きみを守る。」

龍の言葉は瑠奈の心にストンっ、と入ってきて安心した。

瑠奈は目に溜まった涙を拭った。

9：春の四季神

「ありがとう……桜井君。」

瑠奈は安心したように、龍に笑顔に向けた。

「やっと笑ったな。」

「えっ……。」

突然の龍の言葉に瑠奈は驚いた。

「だって来栖この部屋に入ってきてから、一度も笑ってなかったし……だからやっと笑った顔見れて……うれしいなって。」

そういつて龍は笑った。

…桜井君って…こんなふうに笑うんだ。

初めてみた龍の笑顔は、とても魅力的だった。

龍と瑠奈の間に、ほのぼのとした雰囲気の流れていたとき、突然周
りからの声が入ってきた。

10：春の四季神

「龍よ。瑠奈様を口説くのは、二人きりのときにしなさい。

皆が困っておるじゃろう。」

秀一のその言葉に二人は、はっとした。

龍は瑠奈の頬に添えていた手をパツと離し、瑠奈は恥ずかしさから俯いてしまった。

秀一は意味深に笑っているし、香林と珠李は嬉しそうに微笑んでいる。

香蘭は少し頬を赤くして、そっぽを向いていた。

相変わらず天磨はどーでも良さそうだったが…。

こんな感じで、一日が過ぎていった。

まだ物語は始まったばかり。

11：春の四季神

昨日…衝撃的なことをたくさん聞いた。

月姫のこと。

四季神のこと。

桜井家のこと。

…そして自分の運命のこと。

——翌朝

目が覚めた瑠奈は、昨日と同じ天井を見ていた。

…夢であればいいのに。

そう思っても、今自分がいる場所が現実をつきつける。

——昨夜のこと

暗くなり家に帰ろうとした瑠奈は、秀一に呼び止められ泊まってくように言われた。

暗くなれば、妖魔は動きやすくなる。

いつ瑠奈を襲ってくるか、わからない。

そう言って瑠奈を泊ませた。

恐怖心もあったため、瑠奈も泊まらせてもらった。

小さい頃両親を亡くした瑠奈は、親戚もおらずただ一人弟がいるだけだった。

そんな弟とも数年前から、お互い一人暮らしをしているため、自由

な暮らしだった。

両親が残してくれた遺産のおかげで、苦勞もせず暮らしている。

12：春の四季神

同じクラスでも、昨日初めて喋ったばかりの桜井君。

そんな人なのにとっても安心する。

・・・信じてみたいと思った。

この安心感も、『月姫』と『四季神』のことが関係しているのだろうか。

瑠奈が昨日からの出来事を振り返っていると、襖の外に気配を感じた。

「おはようございます。」

瑠奈様。着替えをお持ちしました。」

「おはよう、珠李。」

入っていいわよ。」

外にるのが珠李だとわかった瑠奈は、珠李に入るように促した。

「失礼いたします。

洗濯しておいた制服が乾きましたよ。」

そう言って珠李は、笑顔でその手に持っている瑠奈の制服を本人に渡した。

「ごめんなさい。

わざわざ洗ってもらって。

ありがとう。」

瑠奈は珠李に感謝の言葉を述べた。

「いえ…お役に立てたのなら光栄です。」

そう言って珠李は、また笑顔に向けた。

制服に着替えた瑠奈は、珠李に部屋へ案内された。

その部屋には秀一と龍がいた。

13：春の四季神

「おはようございます。」

そう言って部屋に入った瑠奈に2人は、挨拶を返した。

机の上には、ご飯、みそ汁、卵焼き、焼き魚など、日本らしい和食が並んでいた。

席に座った瑠奈を見て、秀一は言葉をきりだした。

「瑠奈様にひとつ提案があるのですが…。」

真剣な秀一の瞳に、瑠奈は背筋がまっすぐなるのを感じた。

秀一は瑠奈の瞳を見て、また口を開いた。

「瑠奈様には、これから桜井家に住んでいただきたいのです。」

「えっ…。」

突然の秀一の言葉に瑠奈は驚いた。

14：春の四季神

「君を守ると言ったのは確かだ。

だが…離れているよりは、できるだけ近いほうがいい。

君を守るためにも、俺の側にいてほしいんだ。」

瑠奈の正面に座っている龍が口を開いた。

「瑠奈様は、お一人で暮らしているのですよね。

やはり一人は何かと危ないでしょう。」

一緒に暮らしてくださると、私たちも安心できるのです。」

秀一は瑠奈にゆっくりと話した。

「お気持ちは嬉しいです。

でも…守っていただくのに…それに加えて一緒に住むなんて…。

瑠奈は両手をギュッと握りしめていた。

ギュッと握りしめていた瑠奈の手に、ふわっと温かいものが触れた。

15：春の四季神

「瑠奈様…私、毎朝この食事を作っていますの。」

突然意味の分からないことを言い出して朝食のほつに、目を向ける珠李。

瑠奈がわけも分からずポカンとしてみると、珠李はさらに続けた。

「この家には女は私しかおりませんの。」

だから家事は自然と私の仕事になるんです。

もし瑠奈様が桜井家に住んでくださったら、一緒に家事を手伝って欲しいんですの。」

そう言って微笑む珠李。

そんな珠李に手を貸すように、周囲も瑠奈を説得しだした。

秀一や龍、珠李に説得されたが、瑠奈の気持ちは動かなかった。

16：春の四季神

「お気持ちは、本当に嬉しいです。

でも……私……今の家がいいんです。

あの家は……お父さんとお母さんとの思い出が……いっぱいまつて
る場所だから……。」

そう言った瑠奈の表情は、申し訳なさそうにしていた。

そんな瑠奈の表情を見ていたみんなは、何も言えなかった。

「瑠奈様……そんな顔をなさらないでください。

私が今言ったことは、気になさらないで。

ただいつでも我々は瑠奈様のことをお待ちしておりますよ。」

そんな秀一の言葉に、瑠奈は目頭が熱くなるのを感じた。

「…はい…。」

ただその返事をするだけで精一杯だった。

1：親友と転校生

「行つてきます。」

朝食を食べ、秀一達に見送られながら、龍と一緒に桜井家を出た。桜井家の門は、庭や家屋が立派なように、堂々としていて大きかった。

その門をくぐって、2人は学校へ向かった。

「…あのさ……」

2人で歩いている中、龍が口を開いた。

「…学校では…今まで通り他人のふりをしよう。」

龍は歩きながら言った。

「どうして…？」

龍の言葉の意図が分からない瑠奈は、龍に聞き返した。

「俺と来栖は、月姫と四季神の関係だ。

このことは、他人には知られてはならない。

…もし他人知られれば、何も知らない人達が混乱する。

どこで誰が見ているかも、分からないし。

だから途中までは、一緒に学校へ行こう。

…でも学校に近づいてきたら、お互いバラバラに行こう。」

そう言われた。

2：親友と転校生

確かに他人を巻き込むのは、いけないことだと思う。

でも…それでも…龍と一緒にいたい。

自然とそう思っていた瑠奈だった。

…この気持ちも、月姫と四季神の力なのかな…？

そんなことを思いながら、先を歩く龍の背中を見つめていた。

「瑠奈…おっはよ！」

校門の目の前で、後ろから声をかけられた。

「おはよ。亜由美。」

瑠奈に元氣よく挨拶してきたのは、中学生のときからずっと一緒の、
笠原亜由美かさはいあゆみだった。

綺麗な顔立ちに、女子の平均的な身長より、少し高い背。

面倒見のよい、母のような姉のような、瑠奈の大切な親友である。

ショートカットの髪が、彼女の容姿をますます引き立てた。

3：親友と転校生

「ねえねえ！知ってる？今日転校生来るんだって！」

亜由美が嬉しそうに言った。

「そうなんだ…。」

瑠奈は昨日からのことを振り返っていて、亜由美の言葉も右から左に流れていた。

隣で亜由美が何か騒いでいたが、瑠奈は適当に返事をしたままだった。

なんだか学校に着いてから、胸騒ぎがする。

昔からそういう勘はさえていて、必ず当たる。

それは良いことにも、悪いことにも…

「…瑠奈！」

「へっ…？」

突然亜由美が瑠奈の名前を叫んだ。

4：親友と転校生

「さっきからぼーっとしすぎ!!」

朝から様子変だし……なにかあったの？」

亜由美は瑠奈の瞳を、真剣に見つめていた。

「……亜由美。」

真剣に自分のことを心配してくれている亜由美。

心配してくれている亜由美に、今悩んでいることを話したい。

だけど……

「平気だよ。……昨日ちょっと遅くまで起きてて、寝不足なだけ。」

…亜由美を巻き込んだじゃダメだ。そう思い亜由美に笑った。

「…本当？」

やはり亜由美は瑠奈のことが心配なようだったが、瑠奈が笑っているのを見て諦めた。

5：親友と転校生

「うん！ほら早く教室入ろう。」

瑠奈は亜由美を安心させるため、笑顔を作り、目の前の教室のドアを開けた。

…私は…親友に嘘をついた。

でもこの嘘を許して…

…心配してくれている亜由美…

…いつも私を支えてくれていた亜由美

…いつかきつと真実を話すから……

今はこの嘘を許して……

6：親友と転校生

それから教室に入り、いつものように亜由美が話したことを、瑠奈は聞いていた。

そうして亜由美と話しているうちに、担任が教室に入ってきた。

「じゃあ、また後でね。」

そう言っつて、亜由美は自分の席に戻って行った。

「よし！HR始めるぞ」

担任が今日の連絡事項などについて、話しはじめた。

瑠奈はその話しも、右から左へと流れてしまった。

そんなとき亜由美が手を挙げた。

「先生！転校生はどうしたの？」

亜由美は先生に、朝話していた転校生について質問した。

亜由美の言葉に周りはざわめきだした。

「先生！転校生ってなに？」

「俺ら話し聞いてないよ！」

口々にクラスの生徒達が疑問を言い出した。

7：親友と転校生

「おい！笠原なんで知ってるんだ！？」

先生は疑問を口にした。

「パパに聞いちゃった。」

そういうと、担任は納得したようにため息をはいた。

なぜ亜由美一人だけが、担任も言っていない転校生の話しを知っているのかというと……

実は亜由美は、この学校の理事長の娘なのだ。

「実はな…転校生のこと…昨日言っの忘れてた。えへっ！」

そう言っておちゃめに笑う先生。

「はいはい。んで先生転校生どうしたの？」

亜由美は先生のかわいらしい態度を、あえて流した。

「そこは流すのか……転校生のことだが、ただの遅刻みたいだ。

朝も職員室来なくってなあ……」

そんな話を先生がしていると、突然教室の扉が開いた。

「うわぁ～遅刻だぁ～！」

そう叫びながら一人の男子が教室に入ってきた。

8：親友と転校生

「こら！転入早々遅刻とはなんだ！」

「先生ゴメン！…道に迷っちゃった。」

そう言っただけの姿に、クラスの女子はイチコロだった。

見た目は爽やかサッカー少年。

茶色に染まった髪が太陽にあたって、キラキラと輝いてるように見えた。

それに綺麗に整った顔。

これでおちない女子はいないだろう。

「まあいい…とりあえず自己紹介しろ…。」

先生がそう言ったので、転校生は自己紹介を始めた。

「えーと…今日からこのクラスでお世話になります。

かやのかすき
萱野一樹です。

よろしくおねがいします。」

そう言って一樹は笑った。

9：親友と転校生

「ねえねえ。萱野君の周り、見事に女子に囲まれてるよねえ」

HRが終わった後、亜由美が瑠奈の席にやってきた。

「しかし…正反対なことに、桜井君の周りは静かだねえ」

亜由美の言う通り、一樹の周りは女子に囲まれているし、廊下にも一樹を一目見ようとする女子で溢れていた。

きつと一樹がニコニコと女子に対応しているのも、人気の理由だろう。

それに対して、龍の周りには誰もいなかった。

昨日の龍は一樹に負けないぐらいかっこよかった。

でも今は……ボサボサの髪にダサイメガネ。

キツチリ着た制服。

どこからどう見ても、真面目な生徒だ。

亜由美と話していると、ふと横に気配を感じた。

瑠奈はその気配を感じた方向を向くと

「来栖瑠奈さんだね。放課後学校の案内してもらえないかな……」

そう言って噂の転校生が瑠奈の横に立っていた。

10：親友と転校生

「ダメかな…？」

少し目をふせて悲しげに言う一樹に

「…いいよ。」

瑠奈はとっさに返事をしてしまった。

瑠奈の返事を聞くと

「ありがとう。じゃあ放課後にね。」

そう言って一樹は去って行った。

「ちょっと!! あんた転校生に何したのよ!？」

亜由美が突然、怒鳴ってきた。

「し…知らない…会ったの、今日が初めてだし…あたしにもなにがなんだか…。」

そんな瑠奈の言葉に、亜由美はため息を出した。

11：親友と転校生

「あーあ。転校生のお気に入りは瑠奈かあ。
こりゃ誰も敵わないな。」

そう言った亜由美の言葉の意味が分からなかった瑠奈は、首を傾けた。

「その表情がダメなんだって…。他の男共はイチコロよ。」

亜由美は瑠奈の頬を軽く人差し指で突いた。

わけが分からない瑠奈の様子を見た亜由美は、またため息をはいた。

「だからね…瑠奈。瑠奈はかわいいのよ。」

そこら辺の女共には、絶対に負けない。

長くて黒い髪。

真っ白な肌。

大きなクリクリの瞳に、ピンク色の唇。

そして…守ってあげたいって思う身長。

そんじょそこらの女なんかには負けない美貌をもってるのよ。」

亜由美のその言葉に、瑠奈は頬を赤くした。

12：親友と転校生

「誉め過ぎだよ。」

肌が白いのは、あんまり外に出ないからだし…

…身長だって小さすぎて嫌だよ。

亜由美ぐらいの身長が欲しいよ。

あたし155ないから、上にあるものとか届かなくて…結構大変なんだよ。

亜由美は160あるし…体型もいいし…羨ましいよ。あたしなんか…全然かわいくないし…。」

そんな瑠奈の言葉を聞いた亜由美は

「かわいい！」

と叫んで瑠奈に抱き着いた。

「まったくあんたって子は…。」

あーもーかわいいなあ。

あたしが男だったら襲ってるわよ。」

亜由美は抱き着いた体を離して、瑠奈の頭をなでなでしていた。

13：親友と転校生

そんな話をしていたら、授業の始まりのチャイムがなった。

亜由美は自分の席に戻っていった。

ずっと授業に集中していると、ふと視線を感じた。

背中に悪寒を感じた瑠奈は、動かしていた手を止めた。

教室の真ん中ぐらいある瑠奈の席。

左斜め前には龍。

右斜め前には一樹。

後ろを振り返るのも怖かった瑠奈は、その時を乗り切った。

そして――…運命の放課後を迎えた。

1：裏切り

視線を感じたのはさっきだけで、その後は何も起こらないまま、放課後まで過ぎて行った。

龍は家での様子とは全く違っていて、見事に地味な生徒を演じていた。

瑠奈は龍が気になって何度か視線を向けたが、目が合うことはなかった。

そんなことに寂しさを感じていた。

そうしてやってきた放課後。

憂鬱な気分悩まされながらも、仕方ないと腹を括った瑠奈。

席を立とうとしたとき、隣に一樹が現れた。

「来栖さん。案内お願いしてもいいかな？」

「うん。いいよ。じゃあいこっか。」

一樹の言葉に返事をした瑠奈は、席を立ち教室の外に2人で出た。

2：裏切り

とつくに帰った生徒たち。

静かな放課後の廊下。

そんな中を隣に並んで歩く、瑠奈と一樹。

2人は夕日に照らされていた。

「夕日…綺麗だね。」

外を眺めていた一樹が、突然言った。

そんな一樹の言葉に

「うん。」

と瑠奈は返事をした。

「この学校って屋上ある？」

一樹が聞いてきた。

「うん。あるよ。屋上行きたいの？」

「屋上からだったら、もっと夕日綺麗に見えると思うんだ。」

そんな一樹の言葉を聞いた瑠奈は、屋上へと足を進めた。

3：裏切り

3階建ての校舎の階段を上って行く2人。

階段を上りきって、屋上への扉を開けた。

その扉の先には、鮮やかなオレンジ色の夕日が広がってた。

「うわぁ……綺麗……」

あまりの美しさに、瑠奈は感嘆の言葉をもらした。

誰もいない校舎は静かで、それがさらに屋上から見る夕日を幻想的に見せた。

少しの間夕日に見とれていた瑠奈は、余りの静けさに違和感を感じた。

生徒がいなくても、鳥や木々のざわめきが全く聞こえない。

——おかしい…

そう感じた瑠奈は、後ろにいる一樹に振り向いた。

4：裏切り

「ねえ萱野君…暗くなってきたし、そろそろ帰ろっか。」

瑠奈は周りの雰囲気がおかしいと感じて、早く校舎に入ろうと扉に向かって歩き出した。

——その瞬間、瑠奈は足を止めた。

突然一樹に、手首を握られたからだ。

一樹に手を捕まれた瞬間、体中を嫌なものが流れた。

少しずつ、心臓が速くなっていくのが分かる。

心が逃げると言っているのも…

「かやの……くん……どうしたの？……手……離して……。」

それでも瑠奈は、語りかけるように話した。

相手はクラスメート。

——そんなはずない。

そう信じたかったから……

5：裏切り

——怖い……

そう感じたとき、屋上の扉が開いた。

その扉の先には、3人の少年の姿。

「一樹！―その手を離せ！」

そう叫ぶ龍。

「龍……やっぱお前たちは、気づくのが早いな……」

3人の姿を見た一樹が発した言葉。

そんな一樹をそっと見る瑠奈。

一樹の目は闘争心を見せていたが、どこか悲しみがあつた。

そんなことを考えていたとき、一樹にギュッと腕を握られた。

「っ……！」

少しずつ強くなっていくその力に、瑠奈は表情を歪めた。

6：裏切り

「一樹!!お前何をしているか分かってるのか?!」

茶髪の少年が叫んだ。

「分かってるよ。」

「だったらなんでや?!」

関西弁の少年が、顔を歪めながら、悲痛な思いで言った。

「…一樹…お前は裏切るんだな…」

龍が真剣な眼差しで、一樹に聞いた。

「…ああ。…俺は四季神を抜ける。」

一樹はその瞬間、左腕についていた腕輪を、思いつき屋上から投げ捨てた。

それと同時に、瑠奈の腕は離された。

龍たちのほうに投げ飛ばされた瑠奈は、バランスを崩して倒れそうになったが、龍に抱きとめられ、なんとか倒れずにすんだ。

7：裏切り

「大丈夫？」

瑠奈に心配そうな目を向ける龍。

瑠奈は首を縦に振って答えた。

——まだ、震えてる・・・

瑠奈は自分の震える手を見て、もう一度一樹に目を向けた。

龍たち3人は、瑠奈を自分たちの背中に隠すと、一樹に目を向けた。

その瞬間、一樹の周りに黒い影が現れた。

——・・・暗闇・・・

まさにそんな感じだった。

「俺の名は萱野一樹。

月姫、また今度会いましょう。

…今度は…2人だけで…。」

そうして一樹は、暗闇の中に消えた。

辺りはもう、闇に包まれようとしていた。

8：裏切り

時は変わって、桜井家にいる瑠奈たち。

瑠奈は龍の部屋にいた。

・・・一樹の正体を知るために。

部屋に流れる沈黙。

部屋には瑠奈と龍、そして、さっきの2人の少年がいた。

瑠奈も龍も黙っていて、時が刻一刻と、過ぎていくばかりだった。

その様子を見ていた関西弁の少年が、急に声をあげた。

「あーっ！もう！たえられへん！

なんやこの空気？！

頭ん中、おかしくなつてまうやる！

ちつたあ喋らんか！」

そう言つて彼は、頭を掻き回した。

9：裏切り

突然叫んだ彼に脅えて、瑠奈は肩をすくめた。

「バカッ！瑠奈ちゃん、怖がつてんじゃないか！」

瑠奈の様子を見た茶髪の彼は、関西弁の少年の頭を叩いた。

「痛いじゃないか！」

俺はこの空気に、たえられんかったただけや！」

2人は負けずに言い合っていた。

そんな2人の様子を見ていた龍が、低い声で言った。

「啓太、黙れ。」

「なんで俺だけやねん!？」

龍の差別!祐輔も怒れや!!」

そう言っ て関西弁の少年… 啓太と呼ばれる人は、文句を言っていた。

10：裏切り

今度は3人で言い合いを始めてしまった。

瑠奈はその様子を見ていて、おかしくてつい笑ってしまった。

その瞬間3人の争いも終わって、みんなで笑い出した。

「お前のせいで、姫さんに笑わたやないか。

まったく…姫さんかんにんな。」

啓太が謝ってきた。

「いついえ、気になさらないでください。」

瑠奈は慌てて手を振った。

そんな瑠奈を見た啓太は、

「姫さん……！かわいい……！」

そう叫んでから、急に瑠奈に抱き着いた。

その瞬間、

——バシッ……！

……ものすごい音がした。

11：裏切り

瑠奈は一瞬だったその様子に、驚いていた。

近くに倒れている啓太。

その近くには、龍と祐輔。

たぶん2人は拳を握っていたので、啓太は殴られたのだろう・・・

「瑠奈ちゃんごめんね。」

このバカが急に抱き着いたりして。」

茶髪の少年、祐輔が謝ってきた。

「ううん。気にしないで。」

瑠奈は微笑みながら言った。

「うん。やっぱり瑠奈ちゃんは、理想通りの女の子だ。」

祐輔の言葉に、瑠奈はキョトンとした。

12：裏切り

そんな瑠奈の様子を見てか、祐輔が慌てて言い直した。

「ああ、ごめんね。」

変な意味はないんだよ。

月姫が理想通りの人だった、ってこと。」

その言葉に、ますます意味が分からなくなった。

そんな瑠奈の不思議を解決してくれたのが、龍だった。

「こいつ小さい頃から、月姫に憧れてたんだ。

だから、今来栖に会えて、嬉しいんだよ。」

龍の言葉に、祐輔は少し照れていた。

13：裏切り

照れていた祐輔が、突然背筋を伸ばしたので、瑠奈もそれにつられて背筋を伸ばした。

「俺は秋の力を司る四季神。

まつざわゆうすけ
松沢祐輔。

月姫を守るため、一生を捧げる覚悟です。」

祐輔はそう言って頭を下げた。

「祐輔だけずるいわ。俺にも自己紹介させて。」

さっきまで倒れていた啓太が、起きてきた。

啓太も瑠奈の前に腰を下ろして、まっすぐに瑠奈を見つめた。

「俺は萩啓太。^{はぎけいた}」

夏の四季神だ。

どんなときでも姫さんを守っちゃんから、安心しいや。」

そう言って笑うもんだから、瑠奈は大人しく首を縦に振った。

穏やかな雰囲気も、一樹の話でガラリと変わった。

みんなが重い雰囲気の中、ゆっくりと語られた。

……一樹の裏切りについて
…

1：真偽と証

ゆっくりと語られた、一樹の裏切り……

悲しくて、辛くて……どうしてって思った。

話しは、一樹が生まれたときから、始まった。

——今から16年前のこと・・

四季神が代々生まれる家は4つあった。

春の力を司る、『桜井家』。

夏の力を司る、『松沢家』。

秋の力を司る、『萩家』。

冬の力を司る、『萱野家』。

4家に4人の男子が同年に生まれることは、月姫の誕生を示し、その4人の男子は、四季神となることが定めとし、代々受け継がれてきた。

しかし、その年の萱野家には、双子が生まれてしまった。

その時生まれた双子の一人が、一樹だった。

2：真偽と証

一族からは、様々な陰口を叩かれ、そのせいで、一樹の母親は自殺。

父親も酒に溺れ、萱野家は終わりだと思われた。

だがその萱野家を立て直したのが、一樹と、双子の兄の一磨^{かずま}だった。

その2人の頑張っている様子を見て、周囲も2人を認めだした。

しかし、そんな幸せも長くは続かなかった。

13歳になったとき、元服とともに、4家の時期当主を決めるときがきた。

他の3家は、何の問題もなく決まったが、萱野家は困った。

兄、一磨か、弟、一樹か。

周囲の評判は、圧倒的に兄、一磨のほうが強かった。

ただ、一磨は昔から体が弱く、四季神の任をこなせるとは、誰も思わなかった。

こうして、萱野家の当主は、一樹になった。

3：真偽と証

一樹が当主になってからも、2人は一緒に萱野家を支えてきた。

両親は幼い頃亡くなっているため、元服の儀式とともに、一樹は当主になった。

歴代の当主の中でも、最年少の当主である一樹。

しかし、異変は起こってしまった。

瑠奈が妖魔に初めて襲われた日。

その日は、『萱野家襲撃事件』が起こった日だった。

あの日の夜、一樹は新しい月姫の居場所を、龍から聞いた。

ずっと分からなかった月姫の居場所が分かり、一樹は大喜びしていた。

龍たちが知る一樹の様子は、そこまで。

4：真偽と証

それから、一磨が行方不明になったということを龍が聞いたのは、一樹が転校してきた日の夕方ことだった。

一樹も月姫に会いにきたんだと思い、特に何も思わなかった龍。

それは、信賴していたからだろう。

学校では瑠奈に話し掛けないということもあり、ずっと黙っていた龍。

一樹にも他の生徒に囲まれているため、話し掛けられなかった。

放課後、瑠奈と一樹が2人でどこかへ行くのを見て、龍も追い掛けようとしたが、祐輔から携帯に連絡が入った。

その内容は、一磨と一樹が行方不明だということだった。

龍は2人に、今、一樹が星花高校にいることを話した。

それを聞き、急いでこっちに駆け付けた祐輔と啓太。

祐輔たちが到着したのは、夕方。

5：真偽と証

ちょうど瑠奈が一樹に学校を案内してあげているとき、龍も一樹の詳しい情報を聞いた。

龍が聞いた内容は、『一樹が一磨を殺した。一樹が一族を滅ぼした。』

そんな内容だった。

龍は、一樹の傍に瑠奈がいたことを思い出し、駆け出した。

絶対、嘘だ！

3人ともそう信じていたが、屋上で一樹を見て、そんな思いも、虚しく崩れ去った。

「あとは来栖が見た通りだ。」

衝撃的なことを聞いた。

6：真偽と証

あの優しそうな萱野君が、お兄さんや一族のみんなを殺したなんて信じられない。

「嘘だよ……あの優しそうな萱野君が……だって……笑った顔だって……すごく優しかったよ……」

瑠奈は信じられず、否定していた。

「俺達だって、一樹のことを信じたいんだ……だけど……萱野家は滅んだ。」

「……それが……真実だ。」

龍が苦しそうに言った。

その後瑠奈は、今日危険な目にあつたため、泊まるように言われた。

桜井家に泊まっていくなつと啓太が部屋に戻ったので、なつも部屋に戻ろうとした。

「来栖！待って！」

龍の部屋の扉を開け、自分の部屋に戻ろうとしたなつを、龍が呼び止めた。

「これ……」

そう言って龍は、なつにあるものを渡した。

7：真偽と証

「萱野君、今日風邪で休みだつて。」

「昨日はあんまり話せなかったから、今日はアピールしようと思ったのに……。」

一樹が休んだのを聞いて、落ち込む女子生徒。

この中で真実を知っている人は、瑠奈と龍だけ……一樹が四季神であることも、一樹が一族を滅ぼしたことも、一樹が兄である一磨を殺したことも。

昨日龍たちが言ったことが、頭の中でぐるぐると渦巻いている。

自分の席に座っていた瑠奈は、左手につけている腕輪を、上からそっと触った。

その腕輪は、昨日龍に渡されたものだった。

8：真偽と証

——昨日の夜

龍の部屋を出て行こうとする瑠奈に、渡されたもの。

それは・・・一樹が屋上で投げ捨てた、あの腕輪だった。

「これ……」

自分の手の平にある腕輪に、瑠奈は驚いた。

「これ…萱野君が屋上から捨てたはず……どうして？」

龍は瑠奈の掌にある腕輪を、複雑な瞳で見つめていた。

「一樹がいなくなった後、香蘭に探してもらったんだよ。」

これは…大切な…四季神の証なんだ。」

「……証……？」

龍は少し俯きながら、自分の左手の腕輪を握った。

9：真偽と証

「今から約1300年前…平安時代に最初の月姫が現れたことは、知ってるよね？」

瑠奈は、小さく首を縦に振った。

「その初めての月姫が、四季神のあかしとして、当時の四季神たちへ贈ったのが、この……『季彩輪』なんだ。」

「…きさいりん…？」

瑠奈は自分の手の中にある、腕輪を見つめた。

「新しい芽がふきだし、春を告げる碧色の『春彩』。

爽やかな青空と太陽が、夏を示す蒼色の『夏彩』。

鮮やかな紅葉が秋を伝える、朱色の『秋彩』。

世界を無に染める冬、白銀色の『冬彩』。

これら4つが、四季神の証なんだ。

もちろん俺も持ってるんだよ。

俺は春の四季神だから、春彩なんだ。」

龍はそういつて、自分の腕についている腕輪を、瑠奈に見せた。

10：真偽と証

「この季彩輪を与えられた者は、四季神として選ばれた誇りをもち、月姫を守るための、覚悟をするんだ……………だけど……………」

そういつて龍は、自分の左手をギュツと握った。

「あいつは……………一樹は……………一族も、四季神も、誇りも……………月姫も裏切ったんだ。」

……………この季彩輪を捨てるってことは、……………そういつことなんだ。

信じたくても……………信じられないんだよ……………これを捨てるってことは……………」

龍は俯いたまま、顔を上げることはなかった。

昨日の龍の話を思い出していた瑠奈は、教室の席に座っている龍を見た。

真面目に授業を受けている龍。

今、龍の心の中は、様々な思いがうごめいているのだろう。

——ガラッ——！！

授業中で静かだった教室の扉が、突然開いた。

そこには……思いがけない人がいた。

11：真偽と証

静かな授業中の教室のドアが、突然開いた。

静かだった教室は、自然とその音に注目するわけで、ノートを見ていた瑠奈も、教室の前のほうのドアを見た。

顔をあげた瑠奈は、驚きのあまり、手に握っていたペンを落としてしまった。

ドアのその先にいたのは……

「ちわーっ……ってあれ？まだ授業中やったん？」

おちゃらけたいつもの関西弁少年。

そう、それは啓太だった。

瑠奈は困惑の表情で見っていた。

なんで啓太がここにいるのだろうか。

彼はここの生徒ではないのに。

「きつ君！　いったい誰だね！　部外者は立入禁止だぞ！」

授業中だった先生が、啓太の姿を見て一瞬フリーズしていたが、ようやく意識を取り戻し、啓太に注意を شدした。

12：真偽と証

「おー先生、すまん、すまん。

まだ授業中だったみたいやな。

かんにんな。」

啓太は注意する先生に脅える様子はなく、昨日のようなテンションで、おちゃめに謝っていた。

「”かんにんな”じゃねえだろ！」

そんな啓太の頭を、祐輔が後ろから思いきり叩いた。

「いてっ！なにすんねん祐輔！？痛いやないか！」

頭をおさえながら、涙目で啓太は反撃した。

「君達……ここは学校だ…部外者は出て行きなさい！」

そんな2人の様子に、先生はとうとうキレた。

「先生、その人たち、はくほう白鳳高校の人だよ。」

先生の怒りを沈めたのは、亜由美の言葉だった。

亜由美の一言で、騒がしかった教室も静かになり、先生も黙ってしまった。

『白鳳高校』そこは全国から選ばれたものだけが通える、超エリート学校だった。

13：真偽と証

——キーンコーン

静まる教室の中で、授業の終わりを告げるチャイムがなった。

「きよっ今日の授業は、これで終わりだ！」

そう言って先生は、教室から急いで去っていった……いったい何が起きているのか分からず、混乱する瑠奈。

そんなとき、啓太が瑠奈を見つけた。

「姫さん！見つけた！昨日ぶりー今日もかわええなあー」

そう言っ、瑠奈のもとに走って、抱き着こうとしている啓太。

すかさず啓太の頭に、祐輔の拳がヒットした。

「さっきからお前は…少しだまっとけ！」

睨んでくる祐輔に、頬を膨らませて啓太は拗ねた。

「いいやんかゝ姫さんに会いたかったし…あり？そういえば…龍は？」

啓太はクラス中を見渡し、龍を探したが、いつもの様子と違う龍を、啓太は見つけることができなかった。

14：真偽と証

「なあ姫さん。龍はおらんの？」

確か同じクラスだったよな？」

瑠奈は、啓太の向こう側に見える龍を、チラッと見た。

龍はいつものように、席に座って本を読んでいた。

どうすればいいのだろうか。

今朝、龍にはお互いの関係を、秘密にしようといわれたばかりだった。

そのため、啓太に何も答えられない瑠奈。

「えっと…」

中々返事をしない瑠奈を見て、啓太は近くにいた女子生徒に聞いた。

祐輔は額に手を当てて

「もお、無理…」

と、ため息をはいていた。

15：真偽と証

「なあなあ。このクラスに、龍っておらんの？」

啓太が質問をした女子生徒は、頬を赤く染め答えた。

龍も啓太も祐輔も、女子生徒にとってカッコイイと言われる部類に入る。

女子生徒が頬を染めるのも仕方がない。

今も、クラスのほとんどの女子生徒が、そのかっこよさに、頬を赤く染めていた。

「えつとー龍くん？って？」

わけがわからないような女子生徒。

啓太はもう一度聞いた。

「そやから、桜井龍や！」

16：真偽と証

その啓太の言葉に、クラス中の視線が一点に向いた。

ざわめく教室。このクラスのメンバーにとって、龍という名前は浮かばなくても、桜井という名前は思い浮かぶ。

そう・・・それは、ただ1人だけ。

「龍？どこにおるん？」

龍の名前を呼ぶ啓太。

——ガタッ！

教室の静寂を壊すように、龍が椅子から立ち上がった。

啓太に視線を向ける龍。啓太もその視線に気づき、ゆっくりと龍の

ほうに近づいた。

「お前・・・龍か？」

啓太は龍の姿を見て、疑問の声をあげた。

しかし龍だとわかると、突然笑い出した。

17：真偽と証

「アハハはっ！マジ！？お前龍なん？

なにそないダサイメガネ、かけてんねん。

髪もボサボサやし…天下の白鳳高校会長様が、聞いてあきれるわ・
」

啓太の言葉に、クラスがまた騒がしくなった。

「白鳳の会長の名前って…なんだったけ…？」

「たしか…『さくらいりゅう』…って…まさか…」

クラス中が騒ぎだした。

ありえない…あの桜井が白鳳の会長…？

誰もがそんなことを、思っただろう。

ざわめく教室。

休み時間のため、廊下には騒ぎを聞いて、他のクラスの人たちも集まってきた。

そんな中、龍が口を開いた。

18：真偽と証

「祐輔：啓太ちゃんと見とけて、言っただろ。」

龍はため息をはきながら、メガネをとり、ボサボサの髪を整えた。

クラスがさらにざわめいた。

さらに騒がしくなる、廊下の生徒達。

普段はダサイメガネに、ボサボサの髪。

休み時間は、本を読んで過ごしている。

『ただのダサイまじめっ子』

そんなレッテルがはられていただろうに・・・今は違う。

いつもと違う口調。

ダサいメガネをはずし、整えられた髪形。

はっきりと見える顔に、誰もが驚いた。

19：真偽と証

「おい。とりあえず教室でるぞ。」

龍は祐輔と啓太を連れて、教室をでていこうとした。

すると龍がドアのところで、教室に振り返った。

「来栖。悪いけど一緒に来て…」

龍が突然言うもんだから、驚いた瑠奈だが

「うっうん！」

とっさに返事をして、龍たちの後に続いた。

4人がでていったあと、教室や廊下はすごいざわめきだった。

1：誓い

瑠奈たちが教室を出て行ったあと、クラスはもの凄い騒ぎになった。それもそのはず。

あの桜井龍が、まさか白鳳高校の生徒会長だつとは・・・誰も思わなかったことだ。

「どうしよう・・・俺、桜井が白鳳の会長だったら、週番とか押しつけなかったし・・・」

「俺も・・・明日から学校どうしよう・・・」

男子は今まで龍にしてきたことを口にし、顔が青ざめていた。

「きゃー、どうしよう。」

桜井君、私の隣の席だったなんて!!」

「ずるいー、私桜井君のファンだったのよ!!」

「なによー、あんた達、桜井龍暗すぎとか言ってたじゃない。」

「それは別よ。」

まさかあの桜井が、白鳳の会長だったなんて・・・ちょーラッキーよね。」

暗くなる男子とは対象に、女子はあこがれの白鳳高校生徒会長桜井龍が、こんなそばにいたことに胸をときめかせていた。

2：誓い

『ついに現れた・・・四季神・・・お前たちを落としてやる・・・
真っ暗な闇の中に・・・』

教室に浮かぶ、暗く怪しい微笑。

はたしてその正体は・・・

瑠奈たちの背後に、暗い闇が迫っていた。

その闇が襲いかかるのは、もう少し先のこと・・・

3：誓い

廊下を歩いていると、やじ馬の生徒たちが、自然と道を開けた。

龍を先頭に瑠奈を守るように囲っている3人。

そんな一行がたどり着いたのは、屋上だった。

昨日は嫌な空気が流れていた屋上も、今は爽やかな風が吹いている。

涼しげな風が、秋の訪れを告げていた。

「それで…祐輔と啓太は、なんで学校に来たんだ？」

屋上にたどり着いた龍は、あからさまに、怒っている雰囲気を出していた。

「悪い、緊急だったんだ。携帯もでないから、多分授業中だと思って…休み時間にこっそり、龍に近づこうとしたんだ…なのになにこいつが…」

祐輔は啓太のほうを向きながら、ため息をはいた。

4：誓い

「なんや！？全部俺が悪いみたいやないか！

俺は早よ龍に言わなあかん思つて、ここまできたんや！」

啓太は胸をはり、腰に手をあてて偉そうに言った。

そんな啓太を、龍は冷めた目で見ていた。

「へー、勝手に学校に乗り込んできて、俺の正体バラして…よっぽど大事な話しなんだろうな。」

龍は啓太を睨みながら言った。

「当たり前やろ！この啓太様の言うことに、嘘はない！」

偉そうな啓太を軽く流し、祐輔は本題に入った。

「まあ、今回は本当に大事な話だよ。」

祐輔のいつになく低い真剣な声に、龍は目を鋭くした。

5：誓い

「何があつた。」

「実は、一樹の処分のことで……『きせんかい季泉会』から連絡があつた。

月姫を、本部に連れて来るように……だそうだ……。」

「華泉会が！？クソッ！なんでこんなときだけ動きが早いんだ……！
！」

龍はいらついているのか、語調を荒げた。

「龍……こりゃヤバイで。」

はよどうにかせな……時間が迫ってる……」

啓太までもが、真剣な表情で話しているから、瑠奈は3人の会話に入る事ができなかった。

そんな様子を、祐輔が感じ取った。

「瑠奈ちゃんごめん。俺らだけ話してて…意味わからなかったよね。」

祐輔は瑠奈にたいして、申し訳なさそうに謝った。

6：誓い

「いや…大丈夫だよ。」

大事な話なんですよ。

私…教室もどろつか？」

瑠奈がそんなことを言うもんだから、祐輔は慌てて否定した。

「違うよ。この話は、瑠奈ちゃんにも関係あることなんだ…」

「私にも…？」

祐輔は申し訳なさそうに、話し出した。

「まず季泉会についてなんだけど…季泉会っていうのは、簡単にいえば月姫と四季神が生きていくために、サポートする人たちの集まりなんだ。」

月姫が誕生すれば、それを守る四季神たちを、よい環境で育て、強くするために鍛える。」

月姫が住む家も、季泉会が全部管理してるんだ・・・まあ、すべてがいいことだとは限らないけどね……」

7：誓い

それっきり祐輔は俯いた。

祐輔が俯くときに一瞬見せた表情は、何とも言えない表情だった。

瑠奈はそんな祐輔に、話しかけることができなかった。

黙ってしまった祐輔に代わって、啓太が話し出した。

「ほんでその季泉会から連絡があっただんだ…今回の一樹のことについて…一族を殺したことと一磨を殺したこと…そのことについて処分を決めるって…」

―― 処分

「まって！処分ってなに…？」

萱野君…どうなるの…？」

瑠奈の言葉に、3人は押し黙ってしまった。

8：誓い

そして、その静寂を打ち破った祐輔の言葉。

「季泉会は…一樹を探し出して…『殺す』…って言ってるらしい…」

怒りをこらえながらの祐輔の言葉。

今にも泣きそうな、啓太の表情。

両手をぎゅっと握りしめる龍。

龍の両手は、かすかに震えていた。

「嘘でしょ!？」

私はまだ萱野君がやったって認めてない!」

瑠奈は手の平をギュッと握りしめて、溢れ出る思いを必死にとめた。

9：誓い

「萱野君が一族を殺した現場を見た人も、証拠もどこにもない…たとえ…季彩輪を捨てても…私はもう一度、彼の口から話を聞きたい。」

瑠奈の言葉に誰も顔を上げない。

瑠奈は痺れを切らし、大声を出した。

「みんなは…信じないの？」

小さい頃からずっと一緒にいたんでしょ？

「…大事な仲間なんでしょ？」

瑠奈は瞳に涙をため、3人に語りかけた。

「私は…萱野君を信じる。」

・・・最後まで・・・信じる。」

言い切った瑠奈も、なぜここまで言えたのか分からない。

根拠も何もないのに、なぜかそう言いきれた。

10：誓い

「なあ・・・」

静かな空気の中で、龍の言葉が響いた。

「月姫の言葉は、絶対だったこと、俺、忘れてた・・・」

龍は青い空を見つめながら、ふと呟いた。

「そう言えば、昔なんかの本で読んだな・・・」

祐輔も昔を懐かしむように、顔をあげた。

「確か小学生の時やなかったっけ？」

「・・・あんどき、書庫で本読んで・・・俺が、本棚から落として、一樹に怒られたけなあ・・・」

啓太も思い出し、少し笑った。

11：誓い

「あつた、あつた。」

一樹すっげー怒ってたよな・・・」

「ああ、俺と祐輔は、あとから2人のこと怒ってたよな・・・」

懐かしそうに語る3人。

「俺達4人・・・いつも一緒だったな・・・」

祐輔の言葉に、瑠奈は静かに涙をこぼした。

「俺、一樹のこと信じる・・・絶対、あいつ捕まえて、俺達の前で、はつきり今回のこと話してもらおうぜ。」

龍はいたずらに笑った。

「そうだな、俺も一樹信じる。」

「俺も、俺も！だって・・・大事な仲間やもんな。」

3人はいつもの笑顔に戻った。

12：誓い

そして3人は瑠奈に向きなあった。

「ありがとう・・・来栖。

俺ら一樹を信じてみるよ。」

龍の言葉に、祐輔や啓太も頷いた。

「私は何もしてないよ。

みんなが萱野君を、信じるって決めたんだし・・・一緒に頑張ろうね。」

瑠奈の言葉に、みんなが頷いた。

「来栖…お願いがあるんだ…」

優しく笑っていた龍が、急に真剣になった。

13：誓い

だが龍が不安そうな顔をしているのを見て、瑠奈はそっと龍の両手を握った。

瑠奈の行動にハツとした龍は、覚悟をしたように話した。

「季泉会の本部に、一緒に行ってもらいたい。

季泉会の人間たちより上の立場なのは、月姫である来栖だけなんだ…頼む…一樹を助けるために…」

「わかった。」

瑠奈は龍の言葉を途中で遮って言った。

「いいよ…私…萱野君を助けるためだったら、行くよ…」

瑠奈はニッコリ笑った。

14：誓い

あっさりと言った瑠奈に、龍たちはキョトンとしてしまった。

「いいのか…？」

季泉会へ行けば、自分が月姫だつて、認めることになるんだぞ…これから危険だつて増えてくる…」

龍は心配そうに言った。

そんな言葉にも笑い返す瑠奈。

「守つて…くれるんでしょ…？」

桜井君も松沢君も萩君も…みんなが守ってくれるなら…大丈夫。」

瑠奈は優しく微笑んだ。

「うん…瑠奈ちゃんは俺達を守る。」

「姫さん俺がついとるから安心しい。」

「来栖…何があっても君を守る。」

3人の言葉はとても心に響き、瑠奈は目頭があつくなった。

「みんなで萱野君を助けよう。」

4人で誓ったある秋の1日――

1：白鳳学園の会長

4人で誓ったあと、ちょうど授業終了のチャイムがなった。

「来栖…ごめんね。」

授業1時間潰しちゃって…」

「いいよ授業ぐらい…あのさ…質問してもいい…?」

授業なんてどうでもいい。

今は、何よりも聞きたいことがある。

瑠奈は俯きながら聞いた。

龍の了解の返事を聞いて、また口を開いた。

「桜井君は・・・いったい誰なの？」

瑠奈の言葉に、龍の表情が一瞬固まった。

2：白鳳学園の会長

さっきの教室のこと。

啓太が教室に入ってきて、龍が白鳳学園の生徒会長だと言った。

この時代の中で、白鳳学園の名を知らないものは、誰もいない。

その名を聞くだけで、誰も逆らうことはできなくなる。

歴史ある白鳳学園は、歴代の著名人や、世界に名を誇る科学者、文
学者、その他もろもろの人材を生み出す、超エリート校なのだ。

いくら世の中に疎い瑠奈でさえ、その名前は知っている。

その学校には、本当に選ばれたものでしか、入学は許可されること
はない。

しかも、その学校の生徒会長だ。

いったい龍は何者なのか。

瑠奈の中の疑問は、増えていくばかりだった。

3：白鳳学園の会長

「あの…桜井君は…白鳳高校の生徒会長なの…？」

なんで、そんな人がこんな普通の学校に・・・？」

「あゝあれね…」

瑠奈の言葉に龍は空を仰いだ。

何から語ればいいのかだろうか？

龍は心の中で整理し、そろそろ自分のことを話さないといけないと、覚悟を決めていた。

「龍。

俺達は一度、秀一様のところへ行ってくるよ。

今回のことについて、ご意見をうかがってくる。」

祐輔は、啓太の首根っこを捕まえながら、いつもの笑顔で去ろうと
していた。

「祐輔！！俺はまだ姫さんといたいんや！！」

はなせ！！！！」

むなしく響く啓太の言葉も、屋上の扉が閉じるとともに、聞こえな
くなくなった。

4：白鳳学園の会長

辺りに静寂が満ちる静寂。

今さらになって、気まづくなってしまった。

やっぱりこのことについては、触れないほうがよかったのだろうか。

今になって、後悔している瑠奈だった。

「教室戻ろっか。」

ずっと、空を見上げていた龍が、瑠奈に顔を向けた。

その表情は、なんだか少し硬くて、なんだか緊張しているようにも見えた。

屋上を出た瑠奈は、龍と2人で教室に向かって歩いた。

5：白鳳学園の会長

1歩1歩降りていく階段。

時だけが流れる。

そんな中、ふと龍の足が止まった。

「来栖には、ずっと、ちゃんと話さなきゃ、って思ってたんだ。

ただ・・・なんか、来栖が責任感じそうだったから、あんまり言いたくなかったんだけど・・・でも、そんな表情されるぐらいなら、ちゃんと話すよ。」

龍は瑠奈に体を向け、視線を少し下に向けた。

「俺は、確かに白鳳の生徒会長だよ。」

龍の言葉に、瑠奈の胸がはねた。

こんなこと、分かっていたはずなのに。

瑠奈は龍のその言葉が、胸に突き刺さった。

分かっていたはずなのに、こうなることは・・・なのに、どうしても龍と距離を感じてしまう。

龍がとても遠くの人になってしまいそうで・・・

6：白鳳学園の会長

「祐輔や啓太も白鳳の生徒だよ。」

龍はたんとんと語っていった。

瑠奈はその話を静かに聞いていた。

心の中では、様々な思いが、うごめいていたが・・・

「白鳳には、幼等部のころから通ってるんだ。」

そこは季泉会から、俺たち四季神に与えられた環境だった。

いつも4人で固まっていたよ。

ずっと一緒に生きてきたから。」

そうやって語る龍はどこか悲しそうだった。

7：白鳳学園の会長

「そして中等部3年のころ…来栖を見つけた。

すぐ君が月姫だって思ったよ。

これも季彩輪で繋がってた力なのかなって…思った。

そして…君を守るために、この学校にやってきた。」

「じゃあ、桜井君は、わたしのため・・・」

「ストップ！！最初に言っただろ。

来栖が責任を、感じる必要はないって。

これは全部おれが決めたこと。

だから、来栖はそんなこと考えなくていいの。

俺が来栖を守りたくて、この学校に来たんだから。」

龍は瑠奈の言葉を途中で遮り、自分の思いを伝えた。

8・白鳳学園の会長

瑠奈を守りたくて、この学校にやってきた。

中部部3年の秋。

ちょうど、今から1年前、初めて瑠奈を見つけたときの気持は、今でも忘れられない。

それぐらい、出会えた時の気持は衝撃だった。

そして、高校からは白鳳学園から星花高校に変え、ようやく入学式で再び出会うことができた。

「白鳳の生徒会長は、中部部のころから高等部卒業までやらなきゃならないから、今も続けてるってわけ。

この学校にやっけてきても、一応白鳳の会長だから、今でも白鳳に籍
はおいであるんだ。」

9：白鳳学園の会長

「白鳳の会長である俺がここにいたら、混乱が起きるだろ。

だからあんな真面目な格好してたわけ。

まあ、それもすべて無駄に終わったけどな・・・」

そこまで言うと、龍は盛大に溜息をつき、瑠奈に視線を向けた。

「他に聞きたいことは？」

急に話を振られた瑠奈は、とっさに首を左右に振ってこたえた。

「じゃあ、教室もどろっか。」

それきり、2人の間に会話はなかった。

10：白鳳学園の会長

授業が終わり、廊下にもちらほらと、生徒たちの姿があった。

さっきの噂が広まったのか、廊下を歩く生徒たちもは、2人に視線を向けていた。

様々な場所から、こそこそと噂をしている声が聞こえる。

そんな様子を全く気にせず、龍は教室までの道のりを歩いた。

横に視線を向けず、背筋をまっすぐに伸ばし、堂々と歩いている龍は、さすがは白鳳高校の生徒会長だ。

眼鏡をかけ、髪もばさばさの、優等生の龍。

眼鏡をはずし、優しく笑いかけてくれる、普段の龍。

そのどちらにも、今の龍の様子は、当てはまらない。

そんな龍に、瑠奈は悲しくなった。

だんだん龍が、遠くの人になってしまいそうで・・・

11：白鳳高校の会長

ドアを開けた瞬間、クラスは静まり、生徒たちの視線が2人に突き刺さった。

ざわざわとしている教室。

先ほどとは違ってかわって、龍は前髪で隠していた顔をはっきりとだし、メガネもとっていた。

クラスが騒がしくなるのも、仕方がない。

クラス中の女子の視線は、龍にくぎづけだった。

普通なら見ることも、こんなふうに同じクラスになることもできない。
どしない。

だから、女子が騒がしくなるのも、仕方がない。

自分の席に座り、本を読んでいる龍。

龍の後ろ姿を見ていた瑠奈も、自分の席にさっと座った。

12：白鳳高校の会長

いろんな情報が、頭の中でぐるぐると渦巻いている。

そんな瑠奈の目の前に、影ができた。

それに気づいた瑠奈は、顔を上げた。

「瑠奈！あんた白鳳の生徒会と知り合いだったの！？」

そう勢いよく喋ったのは、亜由美だった。

「白鳳の・・・生徒会…？」

瑠奈はなんのことかわからなくて、首を傾げた。

龍は、白鳳高校の生徒会長である。

白鳳高校の生徒会と言われても、瑠奈にはピンとこなかった。

13：白鳳高校の会長

「瑠奈知ってるんじゃないの!？」

全く…あの3人は白鳳の生徒会なのよ。

あの白鳳を仕切ってるトップ3なんだから!」

「でも……びつくりしたわ…白鳳学園生徒会副会長、松沢祐輔と萩啓太。

そして…生徒会長、桜井龍。

桜井君…昔と雰囲気違うから、全然分からなかったわ…今の姿を見たら、すぐに分かるのに…なんで変装なんてしてたのかしら…?」

龍はこんなふうに、騒がれるのが嫌だったのだろう。

14：白鳳高校の会長

「あっ！そういえば亜由美、白鳳のこと詳しいね・・・桜井君のことも、知ってるの？」

亜由美がさつきから白鳳のことに詳しいので、瑠奈は不思議に思っ
て聞いてみた。

「あー…昔一度だけ白鳳学園主催のパーティーに参加したのよ。」

あたしー応理事長の娘だし。

そのときいろいろ知ったのよ。」

「そうなんだ…」

今一度、亜由美がお嬢様だと言つことを思った。

ざわめく教室。

廊下から見ているやじ馬。

そんな中、静かに本を読んでいる龍。

やっぱり彼は、白鳳の会長だけあって、こんな状況にも普段と様子が変わることはなかった。

そんな中・・・放課後を迎えた。

15：白鳳高校の会長

授業も終わり、自分の席を立つ生徒が多くなる中、瑠奈もかばんに教科書を入れ、帰り支度をしていた。

亜由美は用事があると先に帰ったため、瑠奈も帰ろうとしていた。

「来栖……」

自分の名前を呼ぶ声が聞こえた瑠奈は、声のするほうへ顔を向けた。

聞いたことのある声。この声は……

「桜井君……」

そこには龍がいた。

「家まで送ってく。」

そんな龍の言葉に、瑠奈は戸惑った。

「えっ！？いいよ！

悪いし……それに……」

龍は学校で瑠奈との関わりを伏せていた。

瑠奈はそんな龍の朝の言葉を思い出して断った。

16：白鳳高校の会長

「俺の正体ばれちゃったから、朝言ったことは忘れて。」

もう堂々と来栖に話しかけるから。」

瑠奈の気になっていたことが分かった龍は、そう言つと瑠奈の手を握つて歩きだした。

「さっ 桜井君!？」

突然手を握られた瑠奈は驚いたが、そんな瑠奈を無視して龍はどんどん廊下を進み、いつのまにか校門まで来ていた。

龍は一言も話さず、どんどん道を進んでいった。

学校が終わって、生徒が帰ったとはいえ、まだまだ生徒は残っている。

2人を見つめる生徒達は、近くにいる生徒同士で、こそこそと噂をしている。

瑠奈は何か何だか分からず、ただ瑠奈についていくしかなかった。

17：白鳳高校の会長

それから1週間ほど、龍の送り迎えが続いた。

学校の生徒達は、毎日続く龍の送り迎えに、段々と慣れてきたのか、最初のような悲鳴は上げなくなった。

瑠奈も慣れてきたのか、龍の隣にすることに抵抗はなくなってきた。

ただ1つ、胸が高鳴ることは収まらなかった。

亜由美は毎日瑠奈を冷やかしているが、瑠奈は何も言うことができなかった。

何を聞かれても、どういつ関係なのかと尋ねられても、ずっと流していた。

——私と桜井君の間には、月姫と四季神の関係だけ・・・

だから桜井君は、いつも私のそばにいてくれるんだ・・・

もし私が月姫じゃなかったら・・・桜井君は、私のそばにいてくれたのかな・・・

私を・・・見つけてくれたのかな・・・

龍の後姿を見つめながら、瑠奈の心に1つのとげが刺さった・・・

1：使者と謎

龍の正体がばれた次の日の夜、瑠奈は学校帰りに桜井家に立ち寄った。

「姫さ〜ん！！いらっしや〜い！！！！！！」

桜井家の入口についたとたん、瑠奈の目にこっちに駆け寄ってくる、啓太の姿が映った。

「あつ！瑠奈ちゃん、学校お疲れ様。」

祐輔はすかさず啓太を端っこに投げ飛ばし、何事もなかったように、手をパンパンとはたいてから、瑠奈に笑顔を向けた。

「あらあら、祐輔様。」

啓太様をあまりいじめてはいけませんよ。」

珠李は上品に微笑んでから、まるで何事もなかったようにふるまった。

「おう！！姫様・・・って、また啓太の奴なんかやらかしたのか？」

珠李の後ろから、ひょこつと顔を覗かせた香蘭は、面白そうに笑いながら、啓太を指差し爆笑していた。

「龍様、お帰りなさいませ。」

瑠奈様も、ようこそいらしてくれました。

さあ、秀一様がお待ちですよ。」

廊下の奥から歩いてきた光林が、ずっと廊下の奥を示した。

瑠奈は一度深呼吸をして、足を進めた。

2：使者と謎

龍の正体がばれた日。

つまり、瑠奈が桜井家を訪れる前日の日。

その日の夕方、祐輔と啓太は桜井家を訪れていた。

龍の正体がばれてしまったのが、自分のせいだと落ち込んでいる啓太。

「どないしよ・・・俺のせいで・・・龍の正体がばれてしもた。

ゆゝすけゝどないしよゝ」

「知るか。龍にちゃんと後で謝つとけ。

龍も大人なんだから、許してくれるだろ・・・たぶん。」

そう言って、祐輔はいたずらに笑った。

まるでこの状況を、楽しんでいるかのように・・・

3：使者と謎

それからいつものように啓太をいじっていたら、いつのまにか桜井家の門の前についた。

祐輔は門をくぐり、玄関の扉を開けた。

「あら、祐輔様に啓太様。

龍様はまだ学校ですよ。

どうされたのですか？」

2人を出迎えたのは、香林だった。

「さっき龍には会ってきたよ。

今日は、秀一様にお話があるんだ。

秀一様はいらっしゃるか？」

「ええ、お部屋にいらっしゃりますよ。

さあ、お上がり下さい。」

香林の案内され、2人は廊下を進んだ。

4：使者と謎

「秀一様、突然すみません。」

「いやいや、よい。それで、話とは何かな？」

「実は・・・季泉会のことなのですが・・・」

「ああ、そのことか。」

「知っておるよ。一樹のことじゃろ。」

「爺さんも知ってたのか？」

啓太が口を開いた瞬間、秀一を”爺さん”と呼んだことに反応して、部屋の片隅にいた天磨の鋭い視線が刺さった。

「すみません・・・」

啓太はその視線におびえ、どんどん小さくなってしまった。

5：使者と謎

祐輔はそんな啓太にため息をつき、天磨に視線を向けた。

「おい、天磨。

そんなに啓太を睨むな。

啓太がへこんで、後からネチネチ俺に文句言ってくるんだよ。

俺の仕事が増えるだろ。」

「お前のことなど知るか。

わが主を侮辱するなど、許さぬ。」

「はいはい、後で啓太には叱っとくよ。」

まあ、今はこっちを優先したいんでね。」

祐輔は天磨と軽く言葉を交わすと、秀二に向きなおした。

6：使者と謎

「秀一様も知つての通り、季泉会が一樹の処分を決めるために、動き出しました。」

「それで、お前たちはどうするのじゃ？」

もう答えは出ておるのじゃろ？」

秀一は目を閉じ、口元だけが軽く笑っていた。

「ええ、まあ決めたのは、俺たちじゃないですけどね……彼女ですよ。」

「そうか……」

秀一は知っていたかのように、そう呟いた。

「すごいですよ、彼女は・・・この世界に足を踏み込んだのは、ほんの少し前なのに・・・俺たちよりも、強い心を持っている・・・」

「ああ、姫さんは、ホンマに強い。」

啓太も優しい目をして言った。

彼女の強さはどこから来るのか・・・みんなが彼女の強さにひかれていた。

彼女・・・そう・・・瑠奈に・・・

7：使者と謎

いつものように、龍と2人で歩く帰り道。

少しは慣れたとはいえ、まだまだ胸の高鳴りは収まらない。

無言で歩き続ける龍に、いつも瑠奈は、チラチラと目線を向けていた。

あの日：龍が白鳳高校の会長だと分かってから、龍は眼鏡をかけなくなった。

確かに眼鏡がないほうがカッコイイが、瑠奈はこのことを他の人に知られたくなかった。

龍との2人きりの秘密を知られたみたいで…

8：使者と謎

日課になってきた、龍との帰り道。

歩きはじめて5分ぐらいたったとき、突然龍の足が止まった。

——…どうしたんだろう？

不思議に思った瑠奈は、足を止めた。

龍の顔を見ようとしたが、龍にグイッと手を引かれて、龍の後ろに隠れる形になった。

「…桜井く…！？」

「しっ！！黙って俺の後ろに隠れてて！」

龍の名を呼ぼうとした瑠奈は、言葉を途中で遮られ、龍にさらに力強く手を握られた。

9：使者と謎

「来栖…悪い。」

季泉会の動きは、早かったみたいだ。」

いつもより低い龍の声。

それは、瑠奈にも緊張感を与えた。

「俺の後ろに隠れてろ。」

いつもと違う、真剣な龍の声。

怖くなって、龍の手を少し強く握った。

龍はそれに気づくと、

「大丈夫…」

と言って軽く微笑み、握りかえしてくれた。

それだけでも、瑠奈には心強かった。

しかし、目の前にある龍の背中から、今の状況が悪いことは、変わらなかった。

10：使者と謎

「龍様。

いくら貴方が四季神といえども、これは季泉会会長の意向です。

月姫様を、私たちにお預けください。」

——…男の声…？

瑠奈からは見えないが、龍の背中の方こうから、声が聞こえる。

その声は男のもので、感情を感じさせない、仕事口調のように感じた。

龍に”様”とつけているのに、敵意を感じる。

敬語を使っているのに、その言葉と態度が一致しない。

11：使者と謎

「龍様…あなたがたには、月姫様から離れるように、指示したはず
です…」

我々季泉会に、逆らうのですか…？

……萱野一樹のように…」

龍をまつすぐに見つめる男。

男は最初、嫌々敬語を使っていたが、さっきの言葉…

『我々季泉会に、逆らうのですか…？……萱野一樹のように…』

この言葉のときだけ、男は今まで一度も変えなかった表情が、変わ

った。

口端を上げ、ばかにしたような、笑った口元…

いや、あれはまるで、この状況を楽しんでいるような…

12：使者と謎

龍はこの男の今の表情を、瑠奈に見られなくてよかった、と安心した…

——…来栖をこれ以上、不安にさせたくない…

それに…傷ついた表情を、見たくない…

彼女に、笑っていて欲しい…

龍は男のそんな言葉に負けず、今すぐ一樹をばかにした男を殴りたい気持ちを、抑えた。

13：使者と謎

『我々季泉会に、逆らうのですか……？……萱野一樹のように……』

瑠奈はこの男の、声の雰囲気が変わったことに、すぐ気がついた。

——…なんでこんな男に、萱野君をばかにされなきゃ、いけないのよ……！

瑠奈は心の中で、苛立ちを感じた。

だが龍が何も動かないのを見て、瑠奈も思い止まった。

14：使者と謎

恐怖もあつたが、意を決して、瑠奈は龍の背中から、姿を現した。

「月姫様。

迎えが遅くなつてしまつて、申し訳ありません。

我々の元にくれば、月姫様のことは、必ずお守りいたします。

さあ。こちらへ。」

瑠奈を見つけた男は、優しく言ったが、その表情の奥には危険だと感じるものがあった。

瑠奈はその男に、拒絶を感じた。

15：使者と謎

瑠奈に、そつと手を差し出す男。

——パンッ!!

「どういふことですか?……龍様」

男が瑠奈に差し延べた手を払ったのは、龍だった。

「来栖に触るな……お前たちが、簡単に触れていい相手じゃない……」

鋭い瞳。

その言葉に瑠奈の胸が、高鳴った。

16：使者と謎

だが、そんな鋭い瞳に、全く負けない男。

「龍様。」

分かっておられるのですか？

…これは季泉会会長、清平様の意思ですよ…

…あなたは、それに逆らうつもりですか？」

——…どっぴろっぴと…？

まるで、龍が季泉会会長に逆らうことができないような言い方…

そんな男の言い方に、瑠奈は疑問を覚えた。

そして、男は追い撃ちをかけるように、言葉を続けた。

それは、瑠奈に向けられた言葉だった。

17：使者と謎

「月姫様、龍様は白鳳学園の会長でございます。」

龍様は白鳳学園に、なくてはならない存在…

…それなのに龍様は

「黙れ!!!」

それ以上余計な口を開くな!!!」

……申し訳ありません。」

男の言葉を途中で遮る龍。

物凄い剣幕に、瑠奈はビクツと震えた。

だが、男は謝ったのに、本心だとは感じない。

18：使者と謎

瑠奈はさっきの雰囲気と変わってしまった龍に、いてもたってもいられなくなり、恐怖にすくむ足をゆっくりと動かした。

瑠奈はそつと繋がれていた龍の手を離し、龍よりも一步前へ足を進めた。

微かに上がった、男の口元。

今になって、ようやく見えた男の顔は、やっぱり拒絶した。

——…あの人は、危険だ…。

本能なのか、直感なのか分からないが、そう感じた瑠奈は、覚悟を決めて口を開いた。

19：使者と謎

「あなたがたは、どうして私を、季泉会に連れていきたがるんですか？」

「それはあなたが月姫だからですよ。」

「どづいっ……ことですか？」

男が言っている意味が、よくわからない…

なぜ月姫だから、季泉会へ行かなければならないのか…

だかそんな疑問も、次の男の一言でわかった。

20：使者と謎

「あなたは本来ならば、季泉会の管理のもと、暮らしていただかなければならないのです。」

それを龍様に、どうしても…と言われ、今、月姫様は普通の一般人と同じように、暮らしているのですよ。

月姫の歴史の中でも、こんなことは異例ですよ。」

——…桜井君が、私のために…

「しかし、もうそれも無理です…

四季神が1人いなくなった中で、月姫様をこのような世界に、住まわせるわけにはいきません。」

どうぞ、車にお乗り下さい。」

いつのまにか、男の後ろにある、黒い高級車。

21：使者と謎

「私は…あなたたちに守ってもらう必要はありません。」

その言葉に、余裕そうな男の表情が動いた。

「昔から月姫には四季神という守護者がいます。」

まっすぐな瑠奈の瞳。

笑う男。

「しかし…今回は、会長が瑠奈様お一人を連れて来るように、とおっしゃっております。」

つまり四季神は連れていけないのですよ。」

22：使者と謎

「桜井君たちは月姫を……私を守ると、言ってくれました！」

だから私は、桜井君たちと一緒にいます！」

決意を宿した瑠奈の瞳は、揺らぎない思いをしていた。

「よう言ったぜ……！」

姫さん！」

その瞬間、声が聞こえた。

瑠奈と龍の前に現れたのは、啓太と祐輔……

そして……秀一の式の、香林と天磨だった。

23：使者と謎

「まったく…季泉会の使者さんは、いつから俺ら四季神に挨拶なしで、こんなことするようになったの？」

祐輔はにっこり笑いながら言っているが、その瞳に怒りがあるのは分かる。

「四季神……それに桜井秀一の式……」

悔しそうに男は、唇を噛み締めていた。

男の言葉に反応したのは香林だった。

24：使者と謎

「我が主秀一様を呼び捨てにするとは、いけませんね……」

我らが恐ろしいのは分かりますが、だからと言って、龍様と瑠奈様がお2人のときに、こんな形で接触するのは、いかなものでしょうか……」

ニコニコと笑っているのに、どこか恐ろしい雰囲気がある香林に合わせるように、天磨が黒スーツの男たちを投げ捨てた。

その男たちは季泉会の使者たちのようで、5人いる。

どうやら瑠奈を季泉会に連れていくために用意したらしいが、龍を襲う前に、祐輔たちにやられたみたいだ。

25：使者と謎

「クソッ!!」

男たちは悔しそうに顔を歪め、龍たちを睨んでいた。

「おめえら…覚悟はできてるんやろな。」

目の前にいる男たちに、低く鋭い声をだした啓太は、いますぐ男たちに戦いを挑もうとしたが、それを止めさせる声が聞こえた。

「啓太…やめろ。」

静かに龍は啓太を止めた。

26：使者と謎

「はいはい。」

暴れたいのは分かるけど、今はおとなしくしよーな。」

「なんや！？祐輔！？

俺はあいつらを一発殴らんと気がすまん！

殴らせろ！」

龍と瑠奈の後ろで、啓太と祐輔が騒いでいたが、龍はそれを無視して話し出した。

27：使者と謎

「使者さんたち…季泉会会長は、来栖を連れて来いって言ったんだろ。」

「だったら…連れてってやるよ。」

龍は男たちを見据えて言った。

「ただし……条件がある。」

龍は軽く口元を上げ言った。

「条件……？」

男は龍の言葉に疑問を返した。

28：使者と謎

「条件は簡単だ。

来栖と一緒に、俺達を季泉会に連れていけ。

ちょうど会長さんに、話があったんだよ。

条件はこれだけ。

簡単だろ？」

自分のペースに巻き込んでいく龍はすごいと思う。

「ふざけるな！

会長からは月姫1人を連れて来いと言われているんだ！」

龍の言葉に、怒りをあらわす男たちだけ

「もしこの条件が飲み込めないなら、あなたがたにはいますぐこの場から消えていただきます。」

瞳を鋭くしながら言っている龍に、抵抗出来なかった。

29：使者と謎

「それでは後日、桜井家にお迎えに参ります。」

男たちはそう言って、悔しそうに去っていった。

『黙れ！！！！それ以上余計な口を開くな！！！！』

季泉会の男が話そうとしたとき、必死に止めた龍の姿。

あれはなぜなのか…

瑠奈の心に1つ、わだかまりが残った。

それから数日後――…

その日がやってきた。

新たな真実を知る日が――…――

1：かすかな光

あれから数日後…

季泉会の者が、瑠奈たちを迎えに来た。

車に乗ってから、3時間ほどたった。

瑠奈たちの乗る車は、30分ほど前からずっと山道を通っていた。

「瑠奈ちゃん…大丈夫？」

だんだん顔色が悪くなる瑠奈を心配して、祐輔が声をかけた。

「ほんまに姫さん顔色悪いで？」

心配しだした啓太に

「大丈夫…ちょっと車に酔っただけだから…」

そう返事をしたが、顔色とともに、息も苦しそうだった。

2：かすかな光

さっきから車が進むに連れて、自分の中で何かがつこめいている。

頭の隅に微かに映る映像は、一体なんなのだろうか？

「来栖。」

もう着くから…あとちょっと我慢してくれ…」

隣に座る龍は、瑠奈の頭を軽く撫でると、瑠奈の頭を自分の胸へと引き寄せた。

一気に赤くなる瑠奈に、龍は全く動じず

「こっちのほうが楽だろ。
少しだけ寄り掛かってろ。」

そう言って、また瑠奈の頭を撫でた。

「ありがと……」

瑠奈は目を閉じたが、眠れなかった。

頭の中に声が響いた…

3：かすかな光

「はいはい。」

啓太は静かにしとこーね。」

さつきから瑠奈と龍を見て啓太が暴れるのを、祐輔が羽交い締めにし口を抑えていた。

それでも暴れる啓太に

「ほら…瑠奈ちゃん目閉じたし…」

ここで啓太が暴れたら、瑠奈ちゃん休めないよ?。」

祐輔の一言を聞いて、啓太はピタッと止まった。

啓太の様子を見た祐輔は

「よろしい。」

と言って啓太の体を解放した。

4：かすかな光

「なんでや…なんで龍なんかの…」

啓太は小声で落ち込み、祐輔はそれを見て、楽しそうに微笑んでいた。

そんな中、季泉会へと到着した。

黒塗りの高級車が、大きな門の前で止まった。

車が止まったのを感じた瑠奈は、閉じていた瞼を開けた。

「来栖。着いたぞ…大丈夫か？」

瑠奈の様子を心配した龍は、声をかけたが

「…大丈夫だから……」

と瑠奈に言われ、渋々引き下がった。

5：かすかな光

啓太や祐輔の後を追ひ、瑠奈も車を降りた。

さっきから気分が優れずにいたが、車から降り地面に足をつけた瞬間、瑠奈の意識はなくなった。

「来栖っ！」

遠くで龍たちが叫んでいるのが聞こえた。

『た……けて……にい……さ……ん』

だれ…

だれなの…？

私の心の中に入ってくるこの声は…

助けを求めるのはだれ……？

6：かすかな光

瑠奈は暗闇に立っていた。

そこでは、自分に助けを求める声が聞こえる。

その声は幼い子供のもので、泣いているようにも聞こえた。

不安になってきた瑠奈は、左手にある冬彩を握った。

その途端瑠奈の頭に、新たな声が流れてきた。

『瑠奈…あなたはまだ力を解放していないわ…

さあ…瑠奈…

目覚めなさい…

そして……—』

6：かすかな光

瑠奈は暗闇に立っていた。

そこでは、自分に助けを求める声が聞こえる。

その声は幼い子供のもので、泣いているようにも聞こえた。

不安になってきた瑠奈は、左手にある冬彩を握った。

その途端瑠奈の頭に、新たな声が流れてきた。

『瑠奈…あなたはまだ力を解放していないわ…

さあ…瑠奈…

目覚めなさい…

そして……—』

7：かすかな光

最後の言葉が聞こえた後目を開けると、心配そうな龍の顔が見えた。

「来栖!!」

「姫さん!!」

「瑠奈ちゃん!!」

瑠奈が目を開けると、3人が身を乗り出してきた。

「よかったよ。」

瑠奈ちゃん急に倒れちゃうからびっくりしたよ……」

「ごめんなさい…」

瑠奈は3人に心配をかけたことを謝った。

「姫さん気分悪ないか？」

啓太はまだ顔色の優れない瑠奈を見て言うが、

大丈夫…

と言われるだけだった。

8：かすかな光

「来栖…いったい何があったんだ…？」

龍のその言葉に瑠奈は飛び起きたが、まだ体は言うことを聞いてはくれなかった。

「来栖！！まだ寝てろ！！」

飛び起きた瑠奈の肩を支えて、横にさせようとするが、逆に瑠奈は龍の腕を掴んで、懇願するように龍の瞳を見つめた。

「桜井君！！」

萱野君の…

萱野君の家に…

行かなきゃ…」

9：かすかな光

「来栖！！」

落ち着け！

何があつたんだ？」

慌てる瑠奈を、龍はゆっくりと宥めた。

龍の言葉に落ち着きを取り戻した瑠奈は、口を開いた。

10：かすかな光

「あのね…夢を見たの。」

小さな男の子が1人で泣いてるの…

その子は

“ 助けて ”

“ お兄ちゃんを助けて ”

って泣いてて…

その子を助けようと思って声をかけたの…

近づいたらいつのまにかその子が消えてて…

そしたら…知らない声がして…

“ 萱野家へ行きなさい ”

って言ったの…

きつと…きつとあれは…

あの男の子は萱野君だよ…」

11：かすかな光

瑠奈の言葉に、息をのむ3人…

さらに瑠奈は続けた。

「萱野君の家に行けば、何か分かるかもしれない…」

きつと萱野君の本当の気持ちがわかるよ！」

一向に口を開かない3人…

心配になって顔を下に向けた瑠奈に

「来栖…萱野家へ案内する。」

という龍の言葉が聞こえた。

バツと顔を上げた瑠奈の前には、優しく微笑む龍の姿があった。

12：かすかな光

「瑠奈ちゃん…起きれる？」

瑠奈を労るように、優しく手を差し延べる祐輔。

「姫さん一樹ん家はこっから少し歩くんや…平気か…？」

優しく声をかけてくれる3人に、瑠奈は驚きの目を向けた。

「みんな…」

信じてくれるの…？

私…夢で見たただだよ…？」

握りしめた手を見つめる瑠奈。

13：かすかな光

「夢で見たけど…来栖はそれを信じるんだろう。」

だったら俺達は…来栖を信じる。」

あの日、屋上で誓ったことが思い出された。

龍の言葉に、瑠奈は目頭が熱くなった。

瑠奈は龍に差し延べられた手を取り、萱野家へ向かった。

小さな灯がやどった…

真つ暗な道に、希望という名の光が見える…

それはだんだんと大きくなっていった…

1：幼き声

歩いてから、10分ほど経っただろうか。

周りの景色はずっと木々ばかりで、朱色や橙色に染まった葉が所々あった。

その木々の間にまっすぐ伸びる道は、最近掃除されていないのか、葉っぱがたまっていた。

「瑠奈ちゃん…ほんとに大丈夫？」

「やっぱり顔色悪いよ。」

「姫さん！」

「俺の背中につてええよ。」

「……大丈夫だから……」

心配する3人。

2：幼き声

大丈夫だと言っている瑠奈も、歩くたびに、萱野家に近づくたびに、さっきの子供の気持ちに心に流れて来て、体も限界だった。

「来栖……」

「大丈夫…」

大丈夫だから…

萱野君のね…子供の頃の

“助けて”

って声が…

歩くたびに大きくなるの……

もうちょっとで…

何かが分かりそうなの…」

3：幼き声

心に流れてくる一樹の声は、大きく強い。

それほど苦しみが大きかったのだろう。

瑠奈はその声が聞こえてくるたびに、体力が減っていくのが分かった。

早く一樹を助けたい。

そんな気持ちだけで瑠奈は歩いていた。

「……………やっぱり無理……………」

「え…きゃっ！」

フラフラの瑠奈を、突然龍が抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこだ。

4：幼き声

「さっ 桜井君!？」

突然抱き上げられて、あたふたする瑠奈。

「来栖今にも倒れそうなんだもん。

あとちょっとだから、おとなしく俺につかまってて。」

それだけ言うと、龍はすたすたと歩きだした。

きつと言ってもおろしてくれないだろうと思った瑠奈は、おとなしく龍に抱かれていた。

5：幼き声

「なんで龍ばかりなんや!？」

姫さん!俺んどこおいで!」

「啓太うるさい。

瑠奈ちゃん辛そうなんだから、静かにしとけ。

うるさいと瑠奈ちゃんに嫌われるぞ。」

啓太をいつものように静める祐輔は、確実に啓太の弱いところをつくので、啓太はおとなしくなった。

しょぼんとする啓太を尻目に、龍は前へ前へと進んでいた。

自分にもたれ掛かる瑠奈を見て、龍は何もできないもどかしさを感じていた。

6：幼き声

だんだん呼吸も荒くなる瑠奈は、瞳を閉じていたがふと瞳を開けた。

——目の前には…門が見えた。

「ありがと…桜井君…降ろして…もう…1人で大丈夫…」

目の前の門を見て、瑠奈は言った。

瑠奈の様子を見て、まだ心配だったが、龍はゆっくりと瑠奈を降ろした。

1人で歩く瑠奈。

古く大きな門を目の前に、一息深呼吸して、瑠奈は足を踏み出した。

7：幼き声

門をまたがり敷地に足を踏み入れた瞬間

——ポタ…

瑠奈の瞳からは、涙が流れていた。

足元から崩れる瑠奈。

顔を掌で覆っているが、次々と涙は溢れてくる。

心配して声をかけてくれる3人にも、返事をできずただ、今見えた

” 真実 ”

に涙を流すしかなかった。

——こんなこと……なんで……もっと早く気づいていれば……

ふと後ろから近づいてくる気配を感じた瑠奈は、流れる涙を袖で拭いた。

8：幼き声

3人も気配を感じ、瑠奈を守るように囲んだ。

「月姫様。

季泉会会長がお呼びです。

屋敷にお戻り下さい。」

季泉会の者であろう黒スーツの男が、瑠奈を呼びにきた。

「はい。分かりました。」

瑠奈は立ち上がり、真っすぐ前を見つめた。

さっきまでの苦しさは、いつのまにかなくなっており、今はただ自分のすべきことを成すために、歩きだしていた。

9：幼き声

男に案内された場所は、宴会場が開けそうなほどの、大きく広い和室だった。

その部屋の奥の中央には、季泉会会長のさないきよひら佐内清平。

その両脇には、季泉会のメンバーの重鎮たちが、ずらっと並んでいた。

清平を中心に、コの字になっている形だ。

部屋に入ってすぐのところに座っている瑠奈たちは、周りからの痛い視線を感じていた。

数メートル先には清平。

そして左右には、ずらっと並ぶ季泉会の重鎮たち。

話には聞いていたが、改めて目の前になると、想像以上の雰囲気だ。

10：幼き声

だがそんな雰囲気にもたえられたのは、後ろの3人のおかげかもしれない。

瑠奈の後ろに並ぶ龍、祐輔、啓太は、何も言わないが、強い安心感を与えてくれる。

静かな部屋の中で、1番最初に口を開いたのは清平だった。

「月姫よ、よくぞ季泉会へいらしてくれた。

歓迎致しますぞ。」

あからさまな上から目線で、瑠奈は清平を一瞬で苦手にした。

清平を苦手にしたのは、直感に近かったかもしれない……

11：幼き声

「季泉会にいれば、我々が月姫様の安全は確実にお守りする。

どうぞ安心してくだされ。」

さも当然に言う清平に、瑠奈は口を開いた。

「私は…あなたがたに守ってもらうために、ここに来たのではありません。」

きつぱりと告げる瑠奈に、ざわめく室内。

そんな雰囲気でも、瑠奈は続けた。

「私は…四季神、萱野一樹の処分を取り消すために来たんです。」

両手をギュッと握りしめた瑠奈は、心の中では焦りと緊張がすごかったが、一切表情にはださなかった。

——…これは…自分にしかできないことだから……

絶対に…負けない!!

12：幼き声

「話によると…四季神の1人を”殺す”そうですね…

今すぐその処分を止めて下さい。」

真剣に言う瑠奈に、清平はクスツと馬鹿にしたように笑った。

「おたわむれが過ぎますぞ、月姫。」

この話は我々が話し合って、決めたことです。

たとえ月姫といえど、これは覆せません…

…まあ…”月華^{げっか}”を使えば…

話は別ですがね……」

13：幼き声

そう言って笑う清平。

馬鹿にしたような笑い。

周囲も清平と同じように笑い出した。

瑠奈を馬鹿にされたことに怒り、反抗するため立ち上がろうとした3人を、瑠奈は右手で制した。

「なら…私が月華を使えば…」

この処分をなかったことにしてくださいね。」

瑠奈の言葉に

「ええ…よろしいですよ。」

清平は自信満々に頷いた。

清平を見た瑠奈は、クスツと笑い、左手を前に差し出した。

1：月華

”月華”

それは…月姫だけが使える神具。

普段は月姫の左手におさまっていて、月姫がその名を呼べば、すぐに現れるという……

だが…これはそう簡単に扱えるものではない。

歴代の月姫でも、扱えるものは少なかったという。

初代だけは、その月華を、器用に使いこなしたというが……

2：月華

月姫として目覚めて、たった1ヶ月しかたっていない姫に、月華など使えるはずがない。

そう思っていた清平は、簡単に瑠奈の条件をのんだ。

だが…その判断は誤っていた。

瑠奈は左手をあげ、ゆっくりと口を開いた。

「月の力に答えていよ！

月華！！」

3：月華

言い終わったと同時に、左手から光が溢れ、部屋全体を包んだ。

眩しさがやみ、瑠奈をみると、立ち上がっている瑠奈の左手には、金色の刀が握られていた。

瑠奈の左手に握られている金色の刀……

それが月華……

「さあ……約束……

守ってもらいますよ。」

瑠奈以外に部屋にいる人は、みんなその光景に驚いた。

もちろん…四季神も。

生きている間に、会えるかわからない月姫。

その月姫しか扱えない月華は、伝説ものだ。

全員初めて見たのだろう。

4：月華

「なぜ…まだたった1ヶ月しか経っていないのに…」

瑠奈の左手の月華を見て、清平は茫然としてしまった。

だがそれは清平だけじゃない…

季泉会の重鎮たちは、初めて見た月華に、口を開くこともできなかった。

…ただ四季神たちが、なんとか意識を取り戻しているだけだった。

5：月華

「この世界に足を踏み入れて1ヶ月しか経っていない私には、月華は使えないと思いましたか？」

「それは……」

瑠奈の言葉に、何も言い返せない清平。

そのことが肯定を表していた。

1歩1歩、ゆっくりと前に進む瑠奈。

そしてその先には清平。

瑠奈は月華の切っ先を清平に突き付け、最初のように言った。

6：月華

「今すぐ…四季神、萱野一樹の処分を取り消してください。」

すぐ目の前にある月華の切っ先に、清平は冷や汗を流した。

そんな清平の答えは1つしかない…

「わかりました…萱野一樹の処分は、なかったことにいたします。」

しかし…このままでは、四季神として示しがつきません。」

清平は渋々頷くと、反論の意を示した。

7：月華

「それなら大丈夫です。彼の処分は私が決めます。」

瑠奈の言葉に、室内がざわめいた。

「月姫様…それはどういことですか…？」

瑠奈の近くにいた老人が聞いてきた。

「萱野一樹の処分は、私が決めると言っただけです。」

「…何かご不満でも？」

ニツコリと笑う瑠奈に、老人は

「いえ…なんでもありません…」

と言って、黙ってしまった。

8：月華

きっと、瑠奈が月華をちらつかせたからだろう…

龍たちは、瑠奈に対する態度を考え直そうと、心の中で思ったのだ
った…

黙った老人を見て、また瑠奈は清平に向き直った。

「ただ…言えることは…」

彼は萱野家襲撃事件の犯人ではありません。

これだけは…言えます。」

9：月華

その後は何も話す事なく、瑠奈たちは部屋を後にした。

日本家屋の廊下を歩く瑠奈たち。

静寂な雰囲気。

周りに建物が何もないこの場所は、口を開かない限り、風にそよぐ葉や鳥の鳴き声しか聞こえない。

——ガクッ

突然瑠奈が足元から崩れた。

10：月華

「どうした来栖!？」

「瑠奈ちゃん!？」

「姫さん!？」

突然崩れ落ちた瑠奈に、龍たちは駆け寄った。

「ごめん…気が抜けちゃって…」

瑠奈がそう言うと、龍がクスツと笑った。

「なっなんで笑うの!？」

龍が笑ったことに対し、瑠奈が頬を膨らませた。

「悪い。」

さっきの威厳と、比べものにならないから。」

「うん。」

さっきの瑠奈ちゃんかっこよかったよ。」

「そやな。」

姫さんよう言ったで。

あのじいさんの顔めっちゃ笑えたで。」

啓太がそんなことを言うもんだから、瑠奈も一緒になって笑った。

12：月華

「よしつ。帰ろっか。」

祐輔がそう言ったので、瑠奈も立ち上がろうとした。

——グイッ

だが急に瑠奈の目線は高くなった。

「さっ 桜井君!？」

目線が高くなった理由…

それは龍だった。

今日だけで龍に2回も抱き上げられた瑠奈は、恥ずかしく顔が赤く
なった。

「あー！！！！」

また龍が姫さん抱っこしてる！

龍！俺が姫さん運ぶんや！」

龍に食いかかる啓太。

13：月華

「桜井君！大丈夫だよ？

一人で歩けるから…」

「俺が来栖を連れていきたいの。

今日は疲れただろ。

よく頑張ったな。」

至近距離で龍にそんなことを笑顔で言われてしまったら、何も反発できなくなつた瑠奈。

——絶対顔赤い…

黙り込んだ瑠奈は、恥ずかしさから俯いてしまった。

14：月華

「また姫さんが……」

ガクツと落ち込む啓太を

「ライバルが龍ねえ…

まあ啓太がんばれ。」

と軽い勢いで言った。

最初のほうは小声で。

「最初なんていったんや??」

っ！何をがんばれなんや？

こら！祐輔！逃げるな！

ちゃんと教える！！」

逃げ出した祐輔を追いかける啓太。

啓太は完全に祐輔に遊ばれていた。

瑠奈は自分のことで精一杯で、周りの様子には気づいてなかったみたいだが…

15・月華

きつとこのときから、

月姫としての”力”も、

1人の少女としての”恋心”も、

目覚めていたのかもしれない…

1：見えたもの

——あのあと、結局門の前にある車まで、龍に抱き上げられたままだった。

帰りの車の中は、みんな無言だった。

……だが行きとは違い、穏やかな雰囲気の流れていた……

桜井家に着いたのは、日が沈みはじめ、辺りが朱く染まっていると
きだった。

2：見えたもの

「いや〜今日も1日疲れた〜」

「瑠奈ちゃん疲れたでしょ。」

お風呂入って、ゆっくりしておいでよ。」

桜井家に着いてから、みんなで廊下を歩いていた。

「あのね…みんなに…」

聞いてもらいたいことがあるんだ…」

緊張しながらも言う瑠奈は、さらに続けた。

「今日私が見たこと、ちゃんとみんなに話さなきゃって思ってた…」

少しずつ声が小さくなる瑠奈は、よっぽど今日見たことが驚いたの
だろう。

3：見えたもの

「……………」

静かになる3人。

そんな中言葉を切り出したのは、彼だった。

「瑠奈様。

そのお話、私にも聞かせてくださいませんかのお。」

背後から聞こえた声は、秀一だった。

「じい様、ただ今戻りました。」

「お帰り龍。」

みんなも疲れただろ。

まずはご飯を食べてきなさい。

食べ終わったら私の部屋において…

…瑠奈様もそのときお話下さい。」

「…はい。」

秀一の言葉に従って、瑠奈たちは食事をとった。

4：見えたもの

「なあなあ姫様。

今日季泉会に喧嘩売ってきたんだろ？

すげーな！！」

楽しそうに言う香蘭。

「こら！瑠奈様にそのような振る舞いをするな！！」

そんな香蘭をしかる香林。

微笑ましく見守る珠李。

瑠奈は心の中がほんわか温かくなった。

しっかりと食事をとったあと、とうとう話すときが来た……

秀一の部屋には、めずらしく天磨もいて、みんなで瑠奈が口を開くのを待っていた。

——そして……

ゆっくりと語られた——

5：見えたもの

萱野家の敷地に入ったとたん、頭の中にいろんな映像が流れてきた・

萱野君たち兄弟が、小さい頃一族から嫌な目で見られていた様子。

・・・それでも・・・兄弟2人で頑張っていた様子。

・・・ようやく一族に認められた様子。

・・・一樹君が当主になった様子。

・・・そして…萱野家が・・・滅んだ様子。

萱野家が滅んだのは、一樹君がやったことじゃない。

眞実は――

6：見えたもの

本当は…一磨だった

……萱野家の一族を滅ぼしたのは……

……一磨だった。

7：見えたもの

私が見たのは… 暗い部屋で赤い月だけが輝いてた．．．．．

．．違う．．．あれは…

—— 血で赤く染まった剣だった。

その剣を持っていたのは、一磨だったの……

一樹君は必死に一磨を止めようとしてたの。

でも・・・でもね、一磨は……操られてたの——

8：見えたもの

「操られてた……？」

「うん…何かはわからなかったけど…」

一磨君もね・・・助けを求めてたの。

一樹君も、そのとき一磨君の異変に気づいたみたい…

操ってる犯人は、わからないけど…

ただ・・・これだけは言える・・・

一樹君と一磨君は、萱野家襲撃の犯人じゃない…

でも…一磨君は操られてたとはいえ、みんなを殺したのは……
変わらない…

私が見えたものは、これだけ…」

瑠奈の長い話終わると、部屋の中に静かな雰囲気 flowed。

9：見えたもの

「一樹は……なんで次の日に俺達のところに来たんだ…？」

ふと龍が口にした言葉。

「俺はあいつが来栖に会いに来たと思って……だから転校してきた時も。」

何も話しかけなかった。」

「まあ、地味な龍と、王子様の一樹が話してたら、噂になるやろな」

「それもお前のせいで、どうしてもよくなつたがな。」

あっさりと告げる龍に、1人啓太は部屋の隅で小さくなっていた。

10：見えたもの

「来栖が見た夢の中では、一樹は一磨の異変に気づいていたんだろう……どうしてだ？」

一磨の異変に気づいていたのに、なぜ……」

龍の視線は、瑠奈の左手にある季彩輪に向けられていた。

きっと、龍は言いたくても、言えなかったのだろう……

今の言葉の後は、誰もが予想できただろう。

だから誰も言わなかった。

「確かにへんやなあ…俺達とこに、わざわざ俺は裏切り者だって言いに來てるようなもんやしなあ。」

「もしかして…一樹も操られてるとか…?」

11：見えたもの

「一磨君の様子は見えたんだけど、一樹君はなんか霞がかかってよく見えなかったの…」

「ごめんなさい…」

「私をもっとしっかりしてれば…」

俯く瑠奈。

・
・
目頭が熱くなり、こらえようと思っても、じわじわこみ上げてくる・

それをこらえるために、瑠奈は唇をかみしめた。

——なんで・・・なんで私は情けないんだろう。

みんなの役に、全然立ってない。

いつも守られてばかりで、私は・・・

12：見えたもの

「瑠奈様…そのようにおっしゃってはいけません。」

「そうだよ！姫様は季泉会を黙らせたんだけ！」

「瑠奈様が見えたおかげで、一樹様と一磨様が救われたのですよ。」

「瑠奈様は、十分頑張っております。」

香林、香蘭、珠李、秀一。

4人の言葉にみんなが頷いた。

天磨はよくわからなかったが・・・

13：見えたもの

” ありがとう ”

瑠奈は心の中でそう思い、ただ頷くだけだった。

その日の夜、時は亥の刻を回っていた。

あれから瑠奈は、また桜井家にお世話になるのは悪いと感じたため、家に帰ることにした。

時間も遅いため、瑠奈は龍に送ってもらっていた。

1：太陽現る

真つ暗闇な中を、龍と2人で歩く。

2人の間には静かな沈黙が流れていた。

「来栖。ありがとな。」

突然龍が口を開いた。

「えっ……？」

なぜ急にありがとと言われたのかわからず、首を傾げる瑠奈。

「来栖のおかげで、一樹と一磨のことを知れたんだ。

来栖にとって見ることは辛かったかもしれないが・・・

俺達にとっては・・・すごくうれしかったんだ。

小さい頃から兄弟のように育ってきた・・・大切な仲間なんだ。」

少し悲しそうな龍。

2：太陽現る

「あつ！もちろん来栖も大切な仲間の一人だよ。」

来栖は俺達のお姫様だからな。」

そう言つて龍は、はにかんだ。

さっきまで悲しそうな顔をしていたのに、急に恥ずかしいセリフを言つ龍。

瑠奈は顔が赤くなるのを感じた。

——夜でよかった・・

そう思う瑠奈だった。

2人で歩いていると、瑠奈は足を突然止めた。

「どうした？来栖？」

——おかしい……。まさか!!

3：太陽現る

異変を素早く察知した瑠奈。

瑠奈が立ち止ったのを感じた龍は、少し後ろにいる瑠奈に振り返った。

だが龍もその気配をすぐに感じ取り、瑠奈に駆け寄った。

龍はすばやく背後に瑠奈を隠し、左手の春彩に軽く触れた。

龍が春彩に触れた瞬間、そこから光が輝きはじめ、気がつけば龍の右手には、瑠奈が龍と出会ったときの、あの剣が握られていた。

瑠奈はその光景に驚いていた。

しかし驚くのは、まだまだ先だった。

気がつけば瑠奈たちは、あの黒い影に囲まれていた。

その影は闇よりも暗い。

瑠奈も左手に触れ、その名を呼んだ。

「月華！」

4：太陽現る

瑠奈の声に反応するように、左手から光があふれ、金色に輝く剣が現れた。

月華は瑠奈の右手に握られていた。

暗闇の中に現れた金色に光る月華は、暗い闇を照らす月のようだった。

まるで闇を照らす光のように……

右手に握っている月華を、瑠奈は勢いよく地面にさした。

その瞬間、瑠奈と龍の周りには、薄い色の膜が張られていた。

「これは・・・結界？」

龍は自分の周りに広がるその膜を見て呟いた。

5：太陽現る

「桜井君！！私は大丈夫だから早く妖魔を！」

瑠奈は叫んだ。

瑠奈の力強い瞳を見て、龍も安心した。

「分かった。」

瑠奈に向って真剣に頷くと、龍は勢いよくその結界を飛び出していた。

何度龍の闘う姿を見ただろうか。

いつも瑠奈は、龍たちが自分を守るために戦う姿を見て、悔しくてしょうがなかった。

例えこの月華を持っていたとしても、戦うことはできない。

この剣は

” 守る ”

ための剣なのだから・・・

6：太陽現る

誰かが教えてくれたわけではない。

だがこの月華を握っていると、自然と体の中に様々な知識が流れ込んでくるのだ。

瑠奈がそんなことを思っているうちに、龍はどんどん妖魔を倒していった。

龍が倒すごとに妖魔は消えていき、だんだん周囲の重い雰囲気も軽くなっていた。

ようやく龍が最後の一匹を倒したとき、瑠奈にも限界がきた。

7：太陽現る

龍が倒すごとに妖魔は消えていき、だんだん周囲の重い雰囲気も軽くなっていた。

ようやく龍が最後の一匹を倒したとき・・・瑠奈にも限界がきた。

まだこの力を使うのは早かったのだ。

月姫として目覚めてから、ほんの少ししか経っていない・・・

体の中に秘めているその力は、瑠奈が思っているよりも大きい・・・

体がその力についていかなかったんだろう・・・

「来栖！大丈夫か！？」

最後の一匹を倒し、瑠奈のもとに駆け寄ろうとした龍は、啞然とした。

8：太陽現る

さっきまでまっすぐな瞳で自分のことを見つめてくれていた瑠奈が、今は重く瞼を閉じ、その場に倒れていたからだ。

いつも向けていてくれるあの笑顔が、なくなっていた・・・

「来栖っ!!」

龍は急いで瑠奈のもとに駆け寄り、瑠奈を抱き上げた。

「おいっ!! 来栖っ!

どうしたんだ?!」

叫んでも瑠奈の目が龍を見ることはなく、その瞼は閉じられたままだった。

だかすかに聞こえる呼吸と、小さく上下する胸に生きていることが分かった。

でも、あの笑顔を、その声を・・・

「来栖・・・」

9：太陽現る

「眠ってるだけだよ。」

龍は急に背後から聞こえた声に、瑠奈を左手で抱きしめ、右手で剣を構えた。

暗い路地から出てくる者の姿は、暗くてよく見えないが、声からして男だろう……

人間であることも……確かである。

ただ……この男は、いきなり気配も何もないところから現れたのだ。

こんなに近くにいたのに……

相手の気配に気づくことができなかった龍は、神経を尖らせた。

「ああ、そんなに警戒しないで。

俺はあんたの敵じゃないから。

つか、瑠奈早く休ませてあげなよ。

そんなに強く抱きしめて、瑠奈苦しそうじゃん。」

10：太陽現る

暗闇から現れた男は、隣の市の中学の制服を着ていた。

かわいらしい顔が、学ランを身にまとうことで、さらにその美しさをひきだしていた。

「まったく……四季神は俺のことも知らないの？」

今だ警戒し続けている龍を見て、彼はため息をついた。

「俺は――」

「え．．．——」？」

彼が伝えた言葉に、龍は一瞬時が止まったように感じた。

そしてその後大きなため息をついた。

「まじかよ．．．．．」

龍は１人、またため息をついた。

11：太陽現る

目が覚めて気がついたことは、ここが自分の部屋だったこと。

そして、ベッドの上で寝ていたこと。

いつのまに眠っていたのかわからず、必死に記憶をたどっていると部屋の扉が開いた。

「あつ！目覚めたんだ。よかった。」

そう言って入ってきたのは・・・龍だった。

「なんで桜井君が・・・ここに...?」

なぜ龍がここにいるのか分からず、首を傾げている瑠奈。

そんな瑠奈の疑問に答えを返すことなく、龍はすたすたと瑠奈のベツトに近づいて来た。

「桜井君どうしたっ…?!」

瑠奈は口を開かない龍にもう一度聞こうと口を開くが、突然龍に抱きしめられ、それ以上何も言えなかった。

12：太陽現る

ベッドの上で龍に抱きしめられ、固まる瑠奈。

龍の胸が顔の前にあり、鼓動がかすかに聞こえてくる。

瑠奈は口を開くこともできず、龍に強く抱きしめられていた・・・

「桜井君…？」

と呼ぶと、さらにギュッと抱きしめられた。

行き場のない手をゆっくり龍の背中に回そうとしたとき、ドアの外からどたばたと足音が聞こえてきた。

その音を合図に龍はバツと離れて、ベッドの横に立った。

瑠奈は今自分が何をしようとしていたのかを考えると、顔が赤くなるのを感じて顔に手を当てた。

——バンッ！！

勢いよく瑠奈の部屋のドアが開いた。

「姫さん！！大丈夫か？！」

そこには息を切らし、額にうつすらと汗を掻いた啓太の姿があった。

13：太陽現る

「よかったわー龍昨日姫さん送って行ったのに、朝になっても帰ってこないから、姫さんのこと襲ってるんじゃないかって思て急いできたんやでー」

そう言つて啓太は、その場で大きく息を吐いた。

「だから言つただろ。」

龍にそんな勇氣あるわけないじゃん。

「・・・まあ・・・俺だったらこんなおいしい状況・・・もつたいないけどね。」

そう言つて祐輔は啓太の後ろから顔を出し、龍に向つてニヤリと笑つた。

「おいおい。四季神は月姫の騎士だろ。

手を出すなんて物騒だね……。妖魔より危ないんじゃない？」

今の様子を見ていた彼は、祐輔の後ろから姿を現した。

「そういえば……。自分誰や？」

姫さん家の鍵開けたん自分やる？」

啓太は不思議そうに尋ねた。

啓太たちが瑠奈の家に訪れたとき、玄関の鍵を開けたのは、彼だったのだ……

- ・ 啓太は特に何も気にせず、部屋の中にどこかかとうって行ったが・

14：太陽現る

「な……んで？」

えっ………太陽？

……どうしてここにいるの？」

そう言ったのは、びっくりした表情の瑠奈だった。

15：太陽現る

「あはは！！！まじ面白い！！

桜井龍はここまで驚かなかったけど、やっぱり萩啓太は予想通りだ。

・・・おまけに松沢祐輔

・・・あんたはやっぱり予想通りだよ。

さすが四季神の頭脳だね。」

「それはどうも。」

一応いろいろ調べたら、君に行きついたんだよ。

『くるすたいよう
来栖太陽』君。

「……君もただの中学生って感じじゃ……ないけどね。」

祐輔は軽く口端を上げ笑った。

16：太陽現る

「一応褒め言葉としてもらっておくよ。」

太陽も同じように笑い返した。怪しい2人。

「ほんまに…姫さんの弟なん…？」

啓太は太陽を指差しながら瑠奈に聞いた。

「この子は……弟の太陽です…」

瑠奈は俯きながら、太陽が弟であることを言った。

「るーな！」

久しぶりの再開なんだから、もっと嬉しそうにしなよ。」

場の空気を感じさせないぐらい、太陽は明るかった……

17：太陽現る

「それで…太陽君…君がここに来た理由はなんだい…？」

祐輔の言葉で、一瞬太陽の表情から笑顔が消えたが、すぐに戻った。

「俺は瑠奈に会いに来ただけだよ？」

「そうかもな…だが…違うんだろ？」

「…本当の目的はなんだ…」

祐輔の真剣な表情に、太陽の表情から笑顔が消えた。

「俺は四季神や月姫のことを知ってる。

・ ・ ・ ・ ・ 瑠奈たちが昨日まで季泉会へ行っていたことも

・ ・ ・ 萱野家のことも ・ ・ ・ 瑠奈が月華を使えるようになったことも……」

18：太陽現る

「なんで…太陽が…？」

瑠奈は弟がここまで知っていることに驚き、声が震えた。

「瑠奈……お前……夢を見ただろ？」

「……俺にも見えるんだよ。」

「え……どうして……？」

瑠奈はあの夢が太陽にも見えたことに、驚きを隠せなかった。

「あのさ……四季神たちは部屋から出て行ってくれない？」

太陽は龍たちを見て言った。

19：太陽現る

「なんで俺たちが出ていかなあかんねん!？」

「おい啓太!!お前は黙つとけ!」

祐輔はいつものように啓太を黙らせた。

相変わらずの早業で……

「わかった……来栖。」

俺達は部屋の外で待ってるから。」

龍はそう告げると、部屋を出て行ってしまった。

祐輔も啓太を引きずって、出て行ってしまった。

1：2人きりの兄弟

——なんで・・・どうして太陽がここにいるの？

数年前に太陽が家を出て行った以来、全く連絡がなかった。

会話も、会うことすらもなかった・・・

あの時より、背も伸び、大きくなった太陽。

昔の太陽とは全然違う・・・

瑠奈は何を言えいいのか分からず、ずっと黙っていた・・・

「なあ、瑠奈・・・父さんと母さん覚えてる？」

沈黙が流れる室内に、太陽の言葉が響いた。

2：2人きりの兄弟

2人きりの室内に流れる沈黙に、気まずさを感じていた瑠奈は、突然両親の話をしだした太陽に、キョトンとしてしまった。

それから太陽は、ポツリポツリと話しだした。

——それは4年前の冬のこと

・・・それは、ちょうどクリスマスの時期。

瑠奈が小学校6年生、太陽が小学校5年生の時だった・・・

あの日はとても寒かった。雪も降り出して瑠奈と太陽は、庭に出て

雪遊びをしていた。

「お姉ちゃん見て！！雪だるまできたよ！！！！」

「うん。太陽すごいね！！」

3：2人きりの兄弟

今よりも幼い2人。

真っ白な雪で、大きな雪だるまを作って喜ぶ太陽。

そんな太陽の笑顔を見て、微笑む瑠奈。

微笑ましい兄弟の姿だった。

瑠奈たちの両親は、ちょうど車で出かけているところだった。

そんな時……雪でスリップしたため、両親の車が事故にあい……
そのまま……亡くなってしまった……

これがきつかけだった・・・

両親の残してくれた遺産のおかげで、瑠奈たちは何不自由なく暮らしてこれた。

ただ、太陽は中学生になってから、瑠奈に対して態度が変わってきた。

4：2人きりの兄弟

今まで

”お姉ちゃん”

と呼んでいたのに

”瑠奈”

と呼び捨てにするようになったり、1人暮らしをしたり・・・

・
会話をすることもない・・・

たった2人だけの家族だったのに・・・

瑠奈は寂しかった・・・嫌われたんだ・・・

そう思って、瑠奈もあまり太陽に関心しなくなった。

しかし、それは瑠奈の勘違いだったのだ。

真実は……違った。

5：2人きりの兄弟

太陽が1人暮らしを始めたのは

『夢見の力』

が目覚めたからだった。

『夢見の力』とは過去・未来を見れる力。

それは瑠奈の中にもある力。

瑠奈の母もこの夢見の力を持っていた。

母が亡くなると同時に、太陽の中にはこの力が芽生えた。

そして瑠奈は月姫の力が目覚めると同時に、この夢見の力が目覚めた。

太陽は中学入学のころには、この力のことをちゃんと理解していた。

だから瑠奈から離れたのだ…

6：2人きりの兄弟

「どづいづこと...？」

なんで太陽が夢見の力を持っていたら、私の傍にいちやいけないの...？」

瑠奈はわけが分からなかった。

「俺は・・・俺は・・・瑠奈の邪魔にはなりたくなかったんだ。」

「へ・・・？」

「だから・・・俺はこうなることを知ってたんだ。」

瑠奈が月姫になることも・・四季神たちにも会うことも・・

全部・・全部知ってたんだ。

7：2人きりの兄弟

俺・・・瑠奈の傍にいたらきつと・・・瑠奈と四季神たちを出会わせてなかったと思う。

瑠奈を・・・こんな危険な目にあわせたくなかったんだ・・・

瑠奈がこの世界に足を踏み入れれば傷つくことはわかった。

今だって・・・力の使いすぎで倒れたんだぞ・・・

でも・・・夢見の力がある以上これは変えられない真実なんだって・・・

そう言い聞かせてた・・・

だったら・・・支えようと思ったんだ。

俺には戦う力はないけど、瑠奈を・・・”姉さん”を助けたいと思っただ。

大切な・・・たった2人きりの兄弟で・・・

たった2人きりの・・・家族だから。」

8：2人きりの兄弟

「太陽……今……姉さんって……」

瑠奈の驚きの表情に、太陽は優しく微笑んだ……

昔より少し大人びているけど、面影の残った太陽の笑顔。

「そんなに聞きたいんだったら、何度でも言うよ。」

「……今までごめんね……姉さん。」

「太陽……」

瑠奈は心の奥から、熱いものがこみ上げてきた。

しかしそれを止めて、太陽に瑠奈のベットに座るように促した。

瑠奈の隣に腰を下ろした太陽は、座った瞬間、背中からふわっと抱きしめられた。

「姉さん・・・？」

太陽が感じた温かさは瑠奈に抱きしめられたものだった。

9：2人きりの兄弟

「ありがとう・・・太陽。」

「姉さんっ！？俺はありがとうなんて言われる資格・・・。」

「ありがとう。私のことをずっと考えていてくれて。」

「こんなに大切にしてくれて・・・」

「・・・姉さん・・・」

太陽はそんな瑠奈の様子に俯いてしまった。

「太陽…私はね後悔なんかしてないよ。」

この力を持ってなかったら・・・みんなに出会えてなかったもん

…だから私は後悔なんてしてない。」

瑠奈の力強い瞳を見て、太陽は少し下を向きながら笑ったが、すぐに真剣な顔をした。

10：2人きりの兄弟

「姉さんがそう思うなら、俺は何も気にしない。

ただ…このままじゃ、この世界では生きていけないよ……姉さんも四季神たちも……」

太陽のその言葉に、瑠奈も真剣に言葉を返した。

「うん…わかってる……」

今のままでは……まったく力が足りない……

「姉さん……強くなりたい？」

「え・・・？」

「姉さんはこの世界で生きていくためには、まだまだ力が足りない。

でもね・・・強くなればいいんだよ。」

「・・・強く・・・」

太陽の言葉を、瑠奈は頭の中で考えた。

11：2人きりの兄弟

「ねえ、姉さん。強くなりたい？」

もう1度太陽に聞かれた瑠奈は、俯いていた顔を上げ言った。

「私は・・・みんなを守るぐらい強くなりたい。」

そんな瑠奈の言葉を聞いて、太陽はさらに言葉を切りだした。

「姉さんは月姫の力と夢見の力を持っている。」

もしその力をうまく使えるようになれば、これからの戦いで力を発揮することができると思うんだ。

だから・・・まずは記憶を取り戻すんだ。」

12：2人きりの兄弟

「記憶・・・？」

「ああ。姉さんには失われた記憶があるはずだ。

幼いころの・・・父さんと母さんの記憶。」

「そういえば・・・なんかうる覚えなんだよね。

・・・お父さんとお母さん、写真では残ってるけど記憶の中では曖昧っていうか・・・」

瑠奈は太陽に言われて自分の記憶をたどってみた。

いつも写真を見ているのに、やっぱり頭の中では虚ろになってしま
う・・・

幼いころの記憶なんて、無いに近い。

13：2人きりの兄弟

「俺にも父さんたちの思い出は、あんまり残ってなかったんだ。

ただ・・・この力を使えるようになってから・・・

今から1年前ぐらいかな。

その頃、急に記憶が戻ってきたんだ。

そしてそれから姉さんの夢を見るようになったんだ・・・

たぶんこの記憶がカギなんだと思う。

きっとその記憶が元に戻れば、姉さんの力はもっと強くなると思う。

└

14：2人きりの兄弟

「・・・記憶を・・・わかった・・・私強くなるためにも記憶を取り戻す。」

「ああ。俺も手伝うよ。」

このとき瑠奈の中で、少しずつ本当の力が目覚めるための、カウントダウンが始まっていたのかもしれない。

1…今どくに…

—その後

「じゃあ姉さん。また連絡するよ。」

「太陽……また一緒に暮らせばいいじゃない。」

別れを告げる太陽に、瑠奈は悲しげに言った。

ようやく分かり合えた兄弟。

「今住んでるマンションのほうが学校に近いし便利なんだ。

それに……前みたいにはならないよ。

ちゃんと連絡もするし、会いにも来る。

だから・・・ね？」

そう言つて首をかわいく傾げる太陽に、瑠奈は何も言えなくなつてしまつた。

「弟よ。姫さんのことは俺に任しとき！」

絶対1人にせえへんからな。

安心して自分の家戻りや。」

「いや。あんた危険人物？2だから。」

「なんやと！？俺はめっちゃ安全やで！？。」

そう言って太陽と啓太は、玄関先で喧嘩をはじめてしまった。

「なんか兄弟みたいだね、あの2人。

そういえば、太陽君が言ってた危険人物？1って、誰のことなんだろうね？」

そう言って見た目爽やか、内心腹黒の策略男、祐輔の言葉に、龍は何も言えずに黙ってそっぽを向いているしかなかった。

2…今どくに…

「じゃあね、姉さん。」

最後に太陽は昔のように明るい笑顔を向けて去って行った。

——そうして向かえた月曜日の朝。

いつものように瑠奈は朝食を食べ、学校へ向かうため玄関の扉を開けた。

その先には…

「おはよう来栖。」

さわやか笑顔の龍がいた。

「なんで・・・桜井君が？」

「だって、お姫様を迎えに来るのが王子様の役目でしょ？」

龍が当たり前のようにそう返事をするのを聞いて、瑠奈は朝から胸が高鳴っていた。

「ほら、遅刻するからいこ？」

龍はそう言つと、さりげなく瑠奈の手を取り学校へと向かった。

「・・・・・・」

「・・・・」

無言での登校。

龍に繋がれている左手に意識をすると、顔が赤くなり瑠奈はさらに胸の鼓動が早まった。

3…今どくに…

ふと龍の顔を見ると、瑠奈は気づくことがあった。

「桜井君…メガネは？」

そう…龍が学校ではいつもつけていたメガネをしていないのだ。

「ああ、あれ？」

もともと白鳳の会長だってバレないためにしてたものだから、今さらもういいかなあって思ってた。

それにメガネないほうが見やすいんだよね。」

そう言っつて龍は空を見上げた。

「うん。メガネも似合っつてたけど、こっちのほうがかっこいい。」

瑠奈は無邪気に笑った。

そんな瑠奈の笑顔に

「不意打ちだろ……」

と小さく呟き、顔を瑠奈から反らした。

そんな甘い雰囲気の中、2人は、いつのまにか校門の前にたどり着いていた。

まだ手を握り続けている2人。

それは、朝の登校時間真っ只中。

2人の姿は目立っていた。

4：今どこに・・・

「キヤア〜!!」

また白鳳の会長と手繋いで登校してる!!!!」

「えっ!?!うそ!?!」

「どこどこ??見たーい!」

女子生徒から好奇と嫉妬の目で見られている瑠奈は、顔を上げられず俯いたままだった。

——・・・一週間ぐらいたつけど、やっぱりまだ慣れないよ・・・

「おい…来栖さん桜井と手繋いでるぞ」

「マジ!？」

…俺来栖さん狙ってたのに・・・もう、無理かな・・・」

こんなふうに言っている男子もいたが、瑠奈の耳には入らず、龍によってその男子は睨まれていた。

5…今どこに…

「おい龍！…お前なに俺の姫さんと手繋いでるんや！？」

さっさと離せ！…！」

ふと瑠奈たちの後ろから、聞き覚えのある声が聞こえた。

「いつから瑠奈ちゃんはお前のものになったんだよ。」

そしてもう1名。

「なんや、祐輔！？」

俺はこの世に生を受けた瞬間から姫さん一筋やで…！」

「お前はいつもうるさいんだよ。」

「なんやと！？この優しくて紳士な俺に……」

「お前が紳士ねえ」。

この世の紳士の基準は、ずいぶんと下がったもんだな……」

「何や！？俺は「啓太、黙れ。」……………」

2人のマシンガントークは、龍の言葉で終わった。

6…今どくに…

いつものことながらすごいなあと思っていた瑠奈は、2人の姿を見て疑問を感じた。

「あの…2人ともどうしてその制服着てるの？」

そう…瑠奈が2人の姿を見て感じたことは、瑠奈たちが通う星花高校の制服を2人が着ていたからだった。

「ああ、これ？」

そんな瑠奈の疑問に答えたのは、祐輔だった。

そして、祐輔はいつもの爽やかな笑顔で、さらりと驚くことを言った。

「星花高校に転校してきちゃった。」

「・・・・・・・・キャー」

その瞬間周りからの黄色い声援が聞こえた。

すべてが女子だったが・・・

なんだか頭が痛くなるのを瑠奈は感じた・・・

——またなんか起こりそう・・・

1人ため息をつく瑠奈だった・ ・ ・

7:今どこに・・・

「松沢祐輔です。」

「萩啓太や！みんなよろしゅうな！！」

——・・・なんでこんなことに・・・

瑠奈は頭が痛くなるのを感じた。

あのあと女子が祐輔と啓太に群がり、なんとか龍に助けられながらその場を脱出した瑠奈は、龍から転校の理由を聞いた。

『ああ、転校してきた理由？』

3人同じ学校のほうが、来栖のこと守りやすいから。』

——・・・そんなことで・・・

瑠奈はがつくりときたが、守ってもらっているのに文句は言えない。

そう思い、彼らの好意？を素直に受け止めることにした。

8…今や…

「うわーすごいね。」

転校したばかりなのに、あんなに女子に囲まれてるよ。」

休み時間亜由美と話している瑠奈は、亜由美が見ているほうに視線を向けた。

視線の先には女子生徒に囲まれる3人の姿。

啓太はニコニコと話しているが、祐輔は上辺だけの笑顔で、龍にいたっては完全に無視だ。

——・なんかみんなの性格がでてるなあ。

3人の姿を見て、瑠奈は自然と笑みがでた。

「ねえねえ！萱野君もあんな感じだったよね！」

亜由美の言葉を聞いた途端、笑顔が消えた。

その言葉が胸に刺さる。

9…今どいに…

——つい最近のことなのに…

最近まで萱野君は、すぐ手を伸ばせる場所にいたのに…

私はその声を…聞いてあげられなかった…

「——なっ！溜奈ってば！」

「あっ！ごめん、亜由美！」

「もー、何よ急に黙って！」

「うつん、なんでもない。」

「萱野君早く風邪治して、学校来れるといいね。」

「うつん……」

——萱野君……今どこにいるの？……

一樹は未だに風邪という理由で学校を休み続けている。

自分を責める瑠奈……だが、瑠奈は変わった。

太陽に言われた言葉を思い出し、顔を上げる瑠奈。

10:今どいじ…

——…私は負けない…強くなるんだ。

みんなを守るために！

長い授業も終わり、昼休みになった。

用事があると亜由美は行ってしまい、1人になった昼。龍たちに話しかけようと思ったが、相変わらず女子に囲まれていた。

瑠奈は屋上でご飯を食べようと思い、1人教室を出てきた。

あの日から一度も来ていなかった屋上・・・

——大丈夫・・・

瑠奈は一度深呼吸をして、屋上の扉を開けた。

「っ!!」

扉を開けた瞬間、頭の中にあの時の記憶が流れてきた。

11…今どっかに…

『一樹!! その手を離せ!』

叫ぶ龍。

『龍……やっぱりお前たちは、気づくのが早いな…』

3人の姿を見た一樹が発した、さっきまでと異なった言葉。

『一樹!! お前何をしているか分かってるのか?!』

3人の表情が今でも頭の中に浮かぶ。

『…一樹…お前は裏切るんだな…』

龍が真剣な眼差し。

『…ああ。…俺は四季神を抜ける。』

——やめて！！そんなこと言わないで！

瑠奈のそんな願いもむなしく、一樹は左腕についていた腕輪を、思いつき屋上から投げ捨てた。

一樹に握れられていた腕を放され、龍たちのもとに投げられた。

龍たちに受け止められ、一樹を見たとき、一樹は黒い闇に覆われていた。

12…今どっかに…

— …暗闇…

『俺の名は萱野一樹。』

月姫、また今度会いましょう。

…今度は…2人だけで…。

そうして一樹は、暗闇の中に消えた。

「来栖！大丈夫かつ！？」

階段から駆け上がった龍は、座り込んでいる瑠奈に駆け寄った。

「平気…」

あきらかに顔色が悪いのに、心配をかけまいと、無理をしている瑠奈。

「うそつけ！保健室行くぞ！」

そんな瑠奈を見かねて、龍は瑠奈の返事も聞かないまま、抱き上げた。

——…ああ、もう何度桜井君に抱き上げられたんだろう…

大丈夫だよ、って言いたいの、気持ちとは反対に瞼が落ちていく。

遠くで桜井君が呼んでる……大丈夫だよ、大丈夫だから…

すぐ起きるから……

瑠奈の意識はそこで途切れた。

最後に一樹が包まれていたあの黒い闇は、萱野家で見ただ、一樹の心の闇のようだった……

” 助けて!! ”

そう叫んでいる、あの幼い一樹の心の奥深くに眠っていた、小さな体に似合わない、黒くて深い、大きな闇……

1：忍び寄る影

『姉さん、強くなりたい？』

そう太陽が聞いた理由が、やっと今…分かった。

——ごめんなさい…太陽……だから太陽はそう言ったのね…太陽はきつとこの夢を見た……だから…

「来栖！？大丈夫！？」

目が覚めた瞬間、見を乗り出した龍の顔が見えた。

瞳を開けた瞬間、真っ先に見えた泣きそうな龍の顔…

——また…こんな表情をさせてしまった…

瑠奈は龍の表情を見て、悔しくて右手を握った。

「桜井…君…」

「んっ？どうした？

気分はどう？ …えっ！？

なにっ！？おいっ！！

来栖、なんで泣いてるんだよ？？」

2：忍び寄る影

龍が慌てるのもわかる。

なぜなら瑠奈が龍の顔を見た瞬間、泣き出したからだ。

微かに聞こえる嗚咽に、龍はなぜ瑠奈が急に泣き出したのかも分からず、オロオロしていた。

「来栖…頼むから、泣くな。」

——泣いてほしくない。

そんな龍の声に諭されて、落ち着きを取り戻した瑠奈は語りだした。

「あのね…」

まだ流れる涙。

だが龍の言葉に安心感を感じ、話そうと決めた。

——けど…これは2人だけじゃ…ダメなんだ…

「…あのね…松沢君と萩君を呼んでほしいの…」

瑠奈は少し俯いていた目線を龍に向けた。

「祐輔と啓太を呼べばいいの？」

「うん…2人にも聞いてほしいの…もちろん桜井君にも…」

龍はそう言った瑠奈の表情を見て、何か感じたのか

「分かった。ちょっと待ってて。」

と言って、部屋から出て行ってしまった。

龍はとにかく泣き止んで欲しくて、瑠奈を抱きしめた。

「…来栖、ゆっくりでいいから…話して?」

龍は瑠奈の背中を摩りながら、優しい声で言った。

3：忍び寄る影

瑠奈は1人きりになり、改めて部屋を見渡した。

ベッドが3つあり、棚には薬品。

白で統一された部屋。

——ここ、保健室だ…

今になってそのことに気づいた瑠奈。

少し開いた窓。

風に揺れるカーテン。

少し肌寒く感じる風。

瑠奈は龍が帰ってくるまで、その様子を見ていた。

——ガチャ…

瑠奈は鍵が閉まるような音が聞こえた。

いつのまにかカーテンの揺れは収まり、部屋の中は静寂に包まれた。

——来た…

直感で感じ取った瑠奈は、右手で左手に触れ、月華を出した。

目の前には黒い影…妖魔が現れたのだ。

さっき倒れたばかりで、体力もまだ戻っていない。

正直今にも倒れそうだったが、必死に自分をつなぎ止めた。

4：忍び寄る影

「月姫…」

妖魔は少しずつ、瑠奈に近づいて来た。

あの日を思い出す…

夕暮れの中助けてくれた、あの少年を…

—— 怖い……

でもあの時とは違う…

私には力がある…！

瑠奈は震える手で、月華を握りしめた。

少しずつ近づく妖魔。

だが、一瞬妖魔の姿が見えなくなった。

「っ!!」

それは一瞬だった。

突然妖魔の姿が見えなくなったと思ったら、急に目の前に妖魔が現れたのだ。

——ドンッ!!!

勢いよく壁に叩きつけられ瑠奈は、突然襲った背中 of 痛みに顔を歪めた。

ズルズルと床に倒れ込むが、完全に床に座り込む前に、首を妖魔に絞められ、背中を壁に押し付けられる形になった。

少し地面から浮かぶ足。

妖魔は片手で瑠奈の首を締め上げ、瑠奈はそれに抵抗するために、両手で妖魔の手をおさえていた。

たが瑠奈と妖魔の力の差は歴然。

瑠奈の抵抗は全く意味がなかった。

月華もさつき妖魔に飛ばされたときに、部屋の隅に飛んでしまい、結果をはり、自分の身を守ることができない。

5：忍び寄る影

——このままじゃダメ…

だんだんと薄れていく意識…

「月姫…」

妖魔は瑠奈を殺そうと、剣を振り上げた。

——力が欲しい…

自分自身もみんなも守れる力が…

『願えば願うほど、それは力になる』

幼い頃母に言われた言葉が、頭を過ぎった。

『瑠奈、いいわね。

どんなときも諦めちゃダメよ。

願いは必ず叶うの。

願えば願うほど、それは力になるんだから。
』

霞みがかった母の顔が、少し晴れた。

—— お母さん…私は諦めないよ…

瑠奈は母の言葉に誓いをたてた。

勢いよく振り下ろされる剣。

瑠奈は全神経を左手に集めた。

振り下ろされる瞬間、瑠奈の左手にある冬彩が光った。

「グワッ!!」

妖魔はその光に弾かれ、後ろのほうに吹き飛んだ。

「ゲホッ!ゲホッ!!」

ようやく息を吸うことができた瑠奈は、床に座り込み、さっきまで妖魔におさえられていた首をさすった。

妖魔は体勢を戻そうと起き上がり、それに気づいた瑠奈は、部屋の隅に落ちていた月華を握りしめた。

6：忍び寄る影

「おのれ…月姫…殺してやる…」

妖魔は吹き飛ばされたことを怒ったのか、先程よりも鋭い目をしていて、殺意に満ちていた。

もう一度強く月華を握りしめた瑠奈は、勢いよく床に月華を突き刺した。

瑠奈がいる場所を中心に、はられる結界。

だが体力も限界である瑠奈の力は、簡単に倒せる妖魔にも敵わないほど、弱っていた…

近づいてきた妖魔は、右手で結界に触れた。

その瞬間、結界と妖魔の手の間に火花がちり、今にも結界は破れそうだった。

——もう…ダメ…

力の限界を感じる瑠奈。

少しずつ結界の中に入り込んでくる、妖魔の手。

バチバチと弾ける火花。

——パリンッ！

結界が敗れた……

――刹那――

――シュッ！――

結界が破れる瞬間、瑠奈の視界に1本の矢が見えた。

7：忍び寄る影

「ギャア!!」

その矢は、妖魔の右腕に刺さっていた。

どうやらその矢は、開いていた窓の隙間から入ってきたようだった。

緊張感が切れ、その場に座り込んだ瑠奈。

妖魔はさっきの矢のおかげか、目の前から消えていた。

「おい！いつまで座り込んでる気だ。

さっさと立て。」

ぼーっとしていた瑠奈の耳に、声が聞こえた。

その声は、さっき矢が飛んできた方向の窓から聞こえる。

その方向を見ると、窓に少年がもたれかかっていた。

「お前が・・・本当に月姫か？」

その少年は瑠奈に怪訝な眼差しを向けた。

窓枠に浅く腰かけ、土足で保健室に入っていた。

右肩には矢をかけていて、右手で弓を持っていた。

「誰…ですか…？」

危険性はないが、気配を消すのが上手な彼を見て、瑠奈は警戒心を剥き出しにした。

8：忍び寄る影

——この人敵じゃない…弓矢持つてるし…助けてくれた人だよね
……

「誰なんですか・・・？」

口を開かない男に、瑠奈はもう一度尋ねた。

「お前は本当に月姫なのかと聞いたんだ。

まさか、月姫がこんな奴だったとは・・・

がっかりだぜ・・・」

彼は両手をポケットに突っ込み、溜息を吐いた。

瑠奈はそんな彼の言葉に、カチンときた。

「さっきから何が言いたいんですか!？」

私、あなたに何かしましたか？」

瑠奈は少年に怒りをぶつけた。

少し荒くなる語調。

9：忍び寄る影

「まあ、いいや。」

そういえば四季神は？」

それを簡単に流す彼。

彼は瑠奈の周りに誰もいないのを見て、瑠奈に尋ねた。

「・・・今出かけてます・・・」

瑠奈は少年にあっさりと言った。

「あれ？簡単に言っちゃうんだね。」

俺のこと怪しいとか思わないの？」

瑠奈の様子を見た少年は、少し真剣な顔をした。

「十分怪しいですよ。」

名前も言わないし、初めて会ったのに、喧嘩腰だし……」

瑠奈はちよつと怒ってるように言った。　「でも……あなたは……違ふ……」

俯きながら言う瑠奈。

そして、ゆっくりと顔を上げた。

「あなたは……違ふでしょ。」

敵じゃない……」

「へえ、何でそう思ふの？」

彼は面白そうに聞いた。

「あなたは・・・敵とは雰囲気が違う。

なんとなく・・・桜井君や、松沢君や、萩君に似てる。

でも、みんなみたいに優しくはないけど・・・

けど・・・あなたは違う。

そう思えるの。

なんでは・・・わかんないけど・・・

あと……助けてくれたし……」

10：忍び寄る影

彼をまっすぐ見つめて言う瑠奈。

最後は氣にくわないのか、言葉がいい加減で、声も小さくなり、視線も少しずつそれた。

「・・・くっ！！アッハハハハ！！」

瑠奈がそこまで言うと、彼は突然笑い出した。

「なっ何なんですか！？」

怒ってたり、急に笑い出したり・・・」

瑠奈の声は、だんだん小さくなっていた。

「なんでもない。

・・あんだ、やっぱり面白いわ。

でもまあ、月姫としてはまだただけだな。」

——…怪しいが、敵ではない彼……一体彼の正体は……？

11：忍び寄る影

2人の間に流れる沈黙。

それを破るように、保健室のドアが開いた。

急にドアが開いたので、目線をそこに向けた。

「姫さ〜ん!!」

1人で寂しかったやろ〜

啓太様がやって来たで〜」

「誰もお前を待ってねえよ。」

啓太の言葉にツッコむ祐輔。

「来栖、悪い、遅くなって…って！」

怪我してる…！」

龍は瑠奈の異変に気づいて、駆け寄った。

床に座り込む瑠奈。

瑠奈の反対側の壁はへこんでいる。

「もしかして、妖魔が現れたの？」

鋭い瞳の祐輔。

「うん…でも、大丈夫だから。」

あの人が助けてくれたから…あれ…？」

瑠奈が視線を向けた先には、ただカーテンが風に揺れているだけだ

った。

さっきまで彼がいた場所には、何もなかった……

1：襲撃

闇のように真つ暗な世界にいる2人。

1人は王のように、少し高めにある椅子に座っていた。

貫禄も凄まじい男……

ただ…普通の人間には見えない…

「長かった…この時が……ようやく我の力も目覚めた…」

椅子に座る男は、自分の姿に嬉しそうに喜び、怪しい笑みを浮かべていた。

「ああ…早く我が手に月姫を…」

少し上を見上げながら、目の前にない何かを掴もうと、右手を伸ばしていた…

「時は満ちた——…今こそあの月姫と四季神を……よいな……一樹。」

「……はい……」

ふと男が下ろした視線…

その先には一樹がいた……

2：襲撃

歩くたびに吐き出す息が白く染まる。

季節は師走に移っていた。

太陽と和解してから、お互い連絡をとることが増えた。

太陽は定期的に瑠奈の元を訪れ、過去の話をした。

『——…ってことがあったじゃん。覚えてる？』

太陽は瑠奈が早く記憶を取り戻すように、細かなことまでいろいろ話した。

だが、瑠奈の反応は…

『ごめん…覚えてない…』

何度もこれの繰り返しだった。

瑠奈は太陽が話すことに全く覚えがなく、他人の思い出を聞いているようだった。

「はあ……」

最近よくつくため息も、寒さから白くなっていた。

毎日同じことの繰り返し。

太陽の話を聞いても、全く頭に入っていない。

瑠奈はそもどかしさをどうすればよいのか分からず、ため息をつくばかりだった。

3：襲撃

「瑠奈ちゃん…そんなに落ち込まなくていいよ…」

「でも…ずっと思い出せないし…」

「だいじょーぶやってー！」

「なんかのきっかけで戻るかもしれへんで！」

「うん……」

「来栖…少しずつでいいから、ゆっくり思い出そうな。」

やっぱり優しい3人。

瑠奈は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

1ヶ月ほど前――

あの保健室での出来事以来、ますます3人は瑠奈の守りを強めた。

登下校3人一緒は当たり前。

どこに行くときも、何をして一緒にだった。

あの時見た夢のことは、保健室の謎の彼のせいで、3人には話せないでいた。

なんだか話すタイミングがなく、そのまま1ヶ月も経ってしまった。

4：襲撃

——…気配が変わった…

学校に向かっていた瑠奈は、周囲の雰囲気の変化に気づいた。

——もしかして…

「おいっ！！来栖！」

「瑠奈ちゃん！？」「

「姫さん！？」「

瑠奈は後ろで3人が驚いているのに気づいたが、返事を返す事なく走った。

寒くて耳は痛いし、吐き出す息もますます白くなる。

だがそんなことを思う余裕もなく、瑠奈はひたすら走りつづけた。

——まさか…こんなに早く……お願い!!

間に合って!!!

瑠奈はひたすら願った。

走って走って、ようやく瑠奈が足を止めた場所

…そこは…

—— 学校 ——

校門の前に立ち尽くす瑠奈。

走りつづけたせいか息が上がり、呼吸を整えようとするたびに、
喉
か熱く感じる。

—— やっぱり…… ——

瑠奈はさっき感じたものが間違いではなかったと確信した。

いっそ嘘ならよかったのに。

心の中での願いは空しく散り、目の前の光景が真実を物語っていた。

5：襲撃

「おい！来栖、どうしたんだ……」

ようやくたどり着いた3人は、目の前の光景に言葉を失った。

「なんや……これ？」

啓太がふと発した言葉。

そんな言葉に瑠奈は答えた。

「ねえ……みんなに話さなきゃいけないことがあったの……1ヶ月前……あの時夢を見たの……」

瑠奈は取り乱さず、平常心で言った。

まるで、なにも考えていないようだった。

「その夢の内容はね……」

そこで瑠奈は言葉を止めてしまった。

「やあ、月姫……君を殺しにきたよ……」

瑠奈たちがいるのは、ちょうど校門のところ。

そこから校舎との間、ちょうど校庭の真ん中に瑠奈の視線は向いていた。

「月姫……君の心臓……ちようだい？」

背筋がぞくつとするほどの寒気。

それが殺気だと気づいた瑠奈は、左手に触れた。

右手に輝く月華。

瑠奈の後ろに立つ3人も現状を理解したようで、さつと瑠奈の前に立ち、目の前を鋭く見ている。

「…みんな…今は余裕がないの……話は後からでいい？」

瑠奈は月華を両手で握りしめながら、視線は目の前から外さず、3人に言った。

6：襲撃

「来栖……これが……この前の夢か……？」

「……うん……」

龍はそんな瑠奈の返事に悔しさが募り、左手をきつく握りしめた。

「龍、今は目の前のことだよ。

早くしなきゃ。」

祐輔の言葉に龍は心を落ち着けようとした。

今焦ってもダメだ。

心にそう言い聞かせても、誰もが龍と同じような考えだろう。

「なんでや…なんでなんや!!」

………「一樹!!!!」

啓太が悲しく叫んだ名前。

それは一樹の名前だった。

「この前言ったでしょう…」

『また会いましょう』

つて……」

口端を怪しく上げながら言う一樹の後ろには、たくさんの妖魔たちがいた。

空は黒く闇のようだった。

1：天磨と四季神

「きゃー！！！！」

瑠奈たちの耳に悲鳴が聞こえた。

それは学校中にいる生徒たちだった。

今は登校時間の真っ最中。

校舎の中には生徒たちもいる。

「おいっ！！どうするんや！？」

他の生徒たちもたくさんいるで！！」

周囲には今登校してきた生徒もたくさんいる。

みんな妖魔を見て悲鳴を上げていた。

妖魔は他の生徒たちには、なぜか手をださなかった。

どうやら先頭に立つ一樹が動かなければ、妖魔も動かないようだ。

だがこのままではいけない。

他の一般生徒を巻き込むのも、時間の問題だ。

2：天磨と四季神

だが、瑠奈たちがこの状況をどうやって回避しようかと考える暇もなく、妖魔は動いた。

——…一樹のたった一言で…

「——…行け。」

それだけでたくさんの妖魔たちは手当たり次第に、近くの人間に襲い掛かった。

「やめて—!!」

瑠奈の叫びも空しく、妖魔は1人の女子生徒に牙を向いた。

女子生徒は恐怖から足を動かすことも叫びこともできず、口と目は開き、脅えてその場に立ちつくしていた。

妖魔の右手が女子生徒を襲おうとしたその瞬間、妖魔の右手がなくなつた。

2メートル近くある妖魔の右手は太く、ごつごつしている。

3：天磨と四季神

そんな妖魔の右手が突然消えた……いや、切られたのだ。

「ギャー！！！」

辺りに広がる妖魔の叫び。

その妖魔の右手は、肩の部分から切られている。

溢れる血。

瑠奈はその光景に震えた。

「来栖！！見るな！！！」

だが龍の叫びは遅く、瑠奈は初めて見たその光景に足がすくんだ。

「なに…あれ…」

瑠奈は体中から力が抜けていくのが分かった。

初めて見るその恐ろしい光景は、瑠奈を恐怖に陥れるのに十分だった。

「……瑠奈ちゃん、ごめん…」

震える瑠奈の肩を、祐輔が支えた。

「…妖魔はね、四季神が倒せば”あんなこと”にはならない。」

祐輔が言う”あんなこと”とは、今まさに目の前に広がる光景だろう。

「ただ、四季神以外の者が妖魔を切ったとき、ああなってしまうんだ……」

いつも龍たちが妖魔を倒すとき、こんなことにはならない。

四季神に切られた妖魔は、一瞬で消えてしまう。

「だけど妖魔は普通の者には殺せない。

いくら切っても、妖魔は死なない。

ただ、ダメージを与えるだけ……だから、俺達以外が妖魔を切ると、あんな風になるんだ。」

瑠奈は今も妖魔の帰り血を浴びながら、闘いつづける者を見た。

4：天磨と四季神

「四季神が妖魔を切ると、浄化されるのですよ…」

後ろから突然声が聞こえた。

「申し訳ありません、瑠奈様。

遅くなりました。」

「秀一さん…」

瑠奈の周りには、秀一、香林、香蘭、珠李、そして…血だらけで今も闘いつづける天磨。

「3人とも、瑠奈様はわしに任せて、早く行きなさい。」

秀一の言葉に、龍たち3人はその場から駆け出した。

「どうしてここに…?」

戸惑う瑠奈の肩に、温かな手が触れた。

「秀一様が不穏な気配を感じまして、急いでこちらに向かったのですよ。」

いつもと変わらない珠李の笑顔に、瑠奈は癒された。

5：天磨と四季神

「珠李、香林、香蘭、瑠奈様を任せたぞ。」

秀一の言葉に3人は頷くと、秀一は校門のほうに向かった。

秀一の手には1枚の札。

何なのだろうかと不思議に思っていた瑠奈に

「これから結界を張るのですよ。」

という、香林の言葉が聞こえた。

「他の生徒のことは、安心していいぜ！姫様。」

秀一が結界を張ったから、外の奴らからは何も見えないし、入ってこれない。

校舎も結界を張ったから、中の生徒たちももう大丈夫だ。」

明るい香蘭の言葉に、瑠奈は少し心が軽くなった。

秀一は隠陽師。

きっと大丈夫だろう。

瑠奈は安心した。

そして、自分のやるべきことを思い出した。

6：天磨と四季神

——…このままじゃダメだ!!

瑠奈は1度月華を強く握りしめると、走りだした。

「瑠奈様!!」

3人が呼び止める声も無視して、瑠奈は走った。

——…きつとこのままだと夢の通りだ…だったら、変えなきゃ!!

瑠奈は勢いよく龍たちのもとに駆け出した。

そこは妖魔と闘う、苦しい世界だった…——

龍と祐輔と啓太は、秀一に瑠奈をたくし、たくさんの妖魔と闘う天磨の元へ向かった。

「天磨！！無理するな！」

龍は天磨の元に駆け寄った。

「秀一の孫だからといって、気安く俺に口を聞くな。」

天磨は心配する龍の言葉を、あっさりと突き返した。

「相変わらず、天磨はじいさんにしか心開かんのかな…」

「まあまあ、天磨は秀一様が大好きなんだから、そんなこと言わないの。」

4人はそばによると、お互い背を向けた。

その周りにはたくさんの妖魔。

7：天磨と四季神

「あちゃゝ困まれたやないか。」

この雰囲気に似合わない、おちゃらけた啓太の声。

「さっさとやるぞ！」

龍のたった一言で、他の3人の目つきが変わった。

そして4人は妖魔に向かって、走り出した。

「春彩！」

「夏彩！」

「秋彩！」

3人はそれぞれの名を呼んだ。

空から一筋の光が瞬き、3人の左手にその光がとまった。

春を告げる碧色の春彩は龍の手に。

夏を示す蒼色の夏彩は祐輔の手に。

秋を伝える朱色の秋彩は啓太の手に。

3人はそれぞれの剣で、妖魔を倒していった。

天磨が持つ銀色の大鎌は、その刃を赤く染めていた。

天磨の闘う姿には無駄がなく、大鎌を持っているにもかかわらず、

しなやかな動きで妖魔を切っていく。

そのあと、天磨によって弱った妖魔を、四季神の3人が倒していった。

8：天磨と四季神

3人の剣には、それぞれの色の石が、銀色の刃の下のほうに埋め込まれていた。

春彩を持つ龍は碧色、夏彩を持つ祐輔は蒼色、秋彩を持つ啓太は朱色という感じだ。

龍は妖魔を淡々とかわし、無駄なく素早く切っていく。

祐輔は計算尽くした鮮やかな動き。

啓太は大きく振りかぶり、妖魔を1発で倒す。

それぞれの闘いかたに、個性が出ていた。

4人の周りの妖魔たちは、少しずつ消えていった。

——…あと少し…

龍がそう思っていたとき、視界に1人の少女が写った。

——…なんでこんなところに！！

「おい！早く逃げろ！！」

龍は少女の元に駆け寄った。

少女に近づくと、その少女に見覚えがあることに気づいた。

「お前は……来栖の……」

その少女は瑠奈の友達の、笠原亜由美だった。

「逃げるぞ!!」

早く亜由美を避難させようとしたが、背後の気配に春彩を構えた。

9：天磨と四季神

「くっ!!」

間一髪のところで、妖魔の攻撃を避けた龍。

だが亜由美もいるなか闘うのはきつい。

周りは妖魔に囲まれた。

「龍!!!!」

遠くで祐輔と啓太が叫んでいる。

2人とも焦った顔付き。

祐輔はいつもの余裕そうな表情とは全く違っし、啓太もいつものような笑顔じゃない。

——…啓太に真剣な表情は似合わないな…

龍は心の片隅でそう思った。

緊張する場面なのに、こんな風に考える余裕ないのに、龍はそう思ってしまった。

一斉に襲い掛かってくる妖魔。

龍はせめて亜由美だけはないと思い、春彩を握った。

「龍——！！！」

遠くで啓太が叫んでいるのが聞こえる。

「桜井君！……！」

龍が瞳を閉じた瞬間、秀一の元にいるはずの少女の声が聞こえた。

「月華！……！」

その名を少女が呼ぶと、龍が握る春彩から光が溢れ、妖魔たちは叫びだした。

「グオ——！！！」

春彩から溢れる光に妖魔たちは苦しみ、龍のそばから離れていった。

1：守りたい

「来栖！！なんでここに！！？」

早くじい様のところに行くんだ！！」

「いや！！私には力があるんだよ！

妖魔を倒せなくてもみんなを守ることができる！

自分の身だつて自分で守るもん！！

迷惑かけないから……だから……そばに居させて……」

最初は勢いのあつた瑠奈。

だがだんだんと声が小さくなり、瞳も潤んできた。

声は微かに震えてる。

「私だけ…置いてかないで…」

瑠奈はギュッと龍の服の裾を握った。

龍はそんな瑠奈に愛しさを感じ、強く抱きしめた。

右手に剣を握っているため、左手で瑠奈の頭に触れ、自分の胸に抱き寄せた。

瑠奈は急に抱きしめられ、危うく右手の月華を落としそうになった。

痛くないけど強く龍の胸に抱き寄せられ、それがとても心地よかった。

「来栖…泣くな。」

もう置いてかないから……そばにいるから……」

龍はゆっくりと、優しく瑠奈の頭を撫でた。

2：守りたい

「あたしはお姫様みたいに、大人しく守ってもらうのはいや!」

龍の胸から顔を上げて言った瑠奈の言葉に、龍は優しく微笑んできた。

「まったく…来栖はお姫様なのに……」

ため息をつきながら言った龍は、まっすぐ瑠奈を見つめた。

「いいか…俺が守るから絶対にそばから離れるなよ。

……絶対に来栖を守るから……」

「うんっ!」

龍は軽く瑠奈の頭を撫でると、瑠奈を背中に隠し、妖魔に向き直った。

「そういえばさっき来栖が月華の名前叫んだとき、春彩が光ったんだよな。」

おかげで妖魔は苦しがつてたし…あれって、月華の力なのか？」

龍はふと思い出したように、瑠奈に尋ねた。

「ああ、あれね…」

瑠奈は龍に月華を見せた。

「月華のここ、石が埋めてあるでしょ。」

瑠奈は月華の刃の柄に近い部分を指差した。

そこには4つの石が埋めてあった。

「この石はね、みんなが持つてる季彩輪と同じ石なの。」

龍はそう言われてよく見ると、本当に4色の石が埋め込まれていた。

3：守りたい

季彩輪はそれぞれの季節を表した色の石を、数珠繋ぎにして腕輪にしている。

その石は特別なもので、初代月姫の力によって作られたと言われている。

「同じ石が埋まってるでしょ。」

これが月華と季彩輪を繋いでるの。

だからさっきのは、あたしが春彩にたくした力。

月華であの力を使うには、ちょっと桜井君から遠かったから。」

瑠奈はそう言って笑った。

「この力の使い方…知ってたのか？」

龍は驚いた。

2ヶ月前までは普通の少女だったのに、ここまで力を使えるとは思ってもなかった。

「なんか、頭の中に入ってきたの…よくわかんないけど……」

瑠奈自信も、あの力には驚いているようだった。

「おのれ……四季神!!」

さっきまで苦しみもがいていた妖魔が、意識を取り戻した。

4：守りたい

「来栖！俺から離れるなよ！！」

龍は目の前から視線を外さず、もう1度春彩を握りなおした。

「うん。」

瑠奈も龍につられて月華を強く握る。

妖魔との間に流れる、無言の空気。

そんな空気を切り裂いたのは、意外な人物だった。

「そっちはっかり見ないでよ。」

俺はここだよ。」

気づいたときには、すでに瑠奈の後ろにいた。

「萱野君……」

「そんな化け物見たような顔しないでよ。」

「一樹！……つてくそっ……!!」

一樹が後ろにいることに気づいた龍は振り向こうとしたが、目の前から迫ってくる妖魔に気づき、振り向くことはできなかった。

「月姫……おいで……」

一樹は右手を差し延べた。

瑠奈は呟いた。

「違う……」

「来栖……？」

龍は背後から聞こえる瑠奈の声に戸惑った。

振り向きたくてもできないことに、苛立ちがつのった。

5：守りたい

「あなたは…誰？」

目の前の一樹は瑠奈の言葉に目を細めた。

「あなたは萱野君じゃない!!」

そう瑠奈は断言すると、月華の切っ先を、目の前に立つ一樹に向けた。

「——…ふっ……」

目の前に立っている一樹は笑ったかと思うと、急に姿が消えた。

その瞬間、襲い掛かっていた妖魔たちが、突然消えたのだった。

「こちらですよ。」

笑ったような薄気味悪い声。

その声は屋上から聞こえてきた。

真っ暗なコートを着ていて、フードを被っているため、顔がよく見えない。

声からして男ということしか分からない。

そして、その男の腕の中には、血だらけの一樹がいた。

「一樹！！！」

「萱野君！！」

一樹の存在に気づいた瑠奈たちは、その名を呼んだ。

遠くでは祐輔たちの声も聞こえる。

6：守りたい

その声に反応するように、閉じていた瞳が開いた。

「……っ……」

「一樹君を離して！」

痛みに苦しむ一樹。

瑠奈は一樹を捕まえている男に叫んだ。

「言われなくとも、この男はもう必要ない。」

男はそう言つと、一樹を屋上から突き落とした。

「一樹！……！」

叫ぶ声。

校舎は4階建て。

その上に屋上がある。

この高さから落ちれば命はない。

しかし誰もが落ちて行く一樹の下に駆け付けるには遠すぎる。

「一樹——！！！」

みんな間に合わない。

そう思っていたとき、一筋の光が横を通った。

7：守りたい

——パンッ！

その光は校門の所から真っすぐ一直線に、ちょうど一樹が落ちる地面の所に刺さった。

そこから光が広がり、一樹はその上にゆっくりと落ちた。

「一樹！！」

普段無口な天磨が、誰よりも先に叫び一樹の元へ走った。

地面に横たわる一樹は、天磨に抱き抱えられながら、浅く息をしている。

体中の傷が痛々しく、瑠奈は瞳に涙をためた。

「間に合ったみたいだな。」

一樹の周りに集まっていた瑠奈たちは、後ろから聞こえた声に振り向いた。

「た…い、よう…」

瑠奈は太陽が現れたことに驚いたが、その後ろに立つ人物にも驚いた。

「詳しい話しはあと。」

今はその人の怪我の治療が先。」

太陽はそう言った。

確かに早く一樹の手当てをしなければいけない。

天磨が一樹を抱えると、みんなも立ち上がった。

「瑠奈!!」

校舎から瑠奈の名を呼ぶ声が聞こえた。

「…亜由美……」

泣き出しそうな亜由美。

8：守りたい

振り返った瑠奈はすぐに亜由美に背を向け、一言だけポツンと言った。

「…ごめん…」

そして瑠奈は歩きはじめた。

校舎から校門までが短く感じた。

この場所で過ごした思い出が、頭の中に蘇る。

もっと一緒にいたかったけど、もう無理なんだ。

そう言い聞かせ、その場を去った。

空を覆っていた厚く重い雲は、少しずつ晴れていった。

校門を出ようとしたところで、瑠奈は重大なことに気づいた。

「どうしたのですか？」

足を止めた瑠奈に気づいた香林は声をかけた。

「どうしよう！！みんなさっきまでのこと見ちゃった！！」

瑠奈は焦った。

今までの出来事が全て、他の生徒たちに見られていることに。

「大丈夫ですよ。」

そんな瑠奈に声をかけたのは、優しく微笑む秀一だった。

「さっきのことはみな忘れます。

私は隠陽師ですからね。

人の記憶を消す術はできますよ。

ただ…あまり使いたくないのは本心です。

他人の記憶を操るのは、余りいいものではありませんからのお。」

せつなく遠くを見つめる秀一に、瑠奈は申し訳なかった。

他人の記憶を操るなんて、嫌なものだ。

それを秀一にさせてしまうことが、悲しかった。

「香林、香蘭。」

わしは学校に残ってやることもある。

手伝いなさい。」

秀一は2人に告げると、学校に向き直った。

珠李に背中を押され歩きだそうとした瑠奈は、後ろを振り返った。

「秀一さん!!」

…ありがとうございます!!」

表情は見えなかったが、秀一が笑ってくれているような気がした。

1：戻ってきた者

——それから1週間

一樹が目覚めることはなかった。

「一樹……」

天磨は一樹が眠る部屋にいた。

『天磨！！』

『早く！こっちこっち！！』

幼いころの2人の姿が、今でも頭に浮かぶ。

「一樹…早く目覚ませ……一磨、迎えに行こうぜ…」

一樹が寝ている静かな部屋で、天磨は1人呟いた。

「しっかしまだ実感わかなあ…」

月が出ている。

虫の音も聞こえない静かな夜。

瑠奈、龍、祐輔、啓太は縁側に座って月を眺めていた。

「……戻ってきたな……」

ポツリ祐輔が呟いた言葉。

静かな夜に響く声は、4人の心に染み渡った。

誰がなんて言わなくても、それが誰を表しているのか分かる。

みんながこの3ヶ月望んでいたこと。

ただ、あと1人足りない。

2：戻ってきた者

「早く…目覚めるといいね…」

瑠奈はそう呟き、また月を眺めた。

今はこの手に一樹が帰ってきただけでも嬉しい。

——早くみんな揃いたい。

瑠奈は月を見て、そう願った。

「瑠奈様。」

廊下の向こうから、珠李が駆け寄ってきた。

「どうしたの？」

「秀一様が皆様にお話があるそうです。」

「わかった。すぐ行くわ。」

秀一の部屋へ向かっていると、庭の桜の木に誰かがいるのに気づいた。

桜井家の庭の桜の木は、庭の中心の塀の近くにあった。

樹齡何百年もある大きな桜の木だった。

月明かりに照らされる顔。

それは見覚えのあるものだった。

「高倉君。風邪ひくよ。」

瑠奈は師走の寒い中外の桜の木に座っている少年に声をかけた。

3：戻ってきた者

「後で行く。」

そう言って彼はまた月を眺めだした。

「こんの糞ガキがあー!!」

せつかく姫さんが声かけてるのになんちゅう態度や!!」!

「はいはい、年下に意地にならないの。」

少年の素っ気ない態度にキレる啓太。

今すぐ殴り掛かりそんな啓太を羽交い締めにする祐輔。

龍はずっと少年を見つめている。

というよりも、睨んでいる。

あの少年のことを知ったのは、1週間前。

ただ、もう少し前に瑠奈は彼に出会っていた。

——1週間前

あの日、秀一と別れてからみんなで桜井家に向かった。

たくさんある和室の中で、ある1室に布団をひき、そこに一樹を寝かせた。

顔の痛々しい傷。

服には血の跡もある。

所々、赤黒く変色している。

「珠李。」

「はい。」

天磨に名前を呼ばれた珠李は、返事をする一樹の横に座った。

珠李は両手を一樹の体の上に置いた。

目を閉じる珠李。

すると珠李の両手から光が溢れた。

一樹の体を全て包み込むその光は、とても温かかった。

4：戻ってきた者

「…暖かい。」

瑠奈は心が満たされるその光を見て呟いた。

まるで、春の日だまりの中にいるような光。

「あれは、珠李の力だよ。」

隣に立つ祐輔が、瑠奈にその光について教えてくれた。

「秀一様の式にはね、それぞれに特殊な力があるんだよ。」

珠李の場合は”治癒”。」

「…治癒？」

「そう…珠李は俺達が怪我をしたときに、その傷を癒してくれるんだ…ただ…これはとくに特殊でね…力の消耗が激しいんだ。」

だから、あまり珠李にこの力は使わせないようにしているんだけど…まあ、今回は特別かな。」

途中でふと、悲しそうな表情を見せた祐輔。

最後にはいつもの笑顔に戻ったが、どこか表情が硬い。

珠李を見てみると、額にうつすら汗をかき、表情も苦しそうだった。

しばらく続いた光が、ゆっくりと小さくなった。

「さいわい一樹様の怪我は軽傷でしたし、傷はすべて治しました。」

…あとは、一樹様が目覚めるのを待つだけです。」

珠李は布団を一樹にかけ、優しい瞳で一樹を見た。

「珠李、ありがとな。」

龍の言葉に、珠李は美しく微笑んだ。

5：戻ってきた者

「さて…一樹のほうは大丈夫みたいだし、太陽君。」

祐輔は一樹の寝顔を見てから、太陽に体を向けた。

「君の隣にいる彼は、誰かな？」

部屋の隅にいた太陽が、祐輔の言葉に顔を向けた。

誰もが気にしていたこと。

瑠奈自身も、彼の正体が気になっていた。

矢が入っている筒を右肩からかけ、左手には弓を持っている彼。

1ヶ月前、保健室で会ったあの少年だった。

あの日、瑠奈を助けてくれた少年。

敵じゃないけど、なぜか瑠奈は心の中で、彼を受け入れることはできなかった。

「彼は誰？」

もう1度尋ねる祐輔。

龍も啓太も黙ったままだ。

「はあ……」

1度小さなため息をついた太陽は、すくつと立ち上がった。

「場所変えましょうか。」

「ここじゃ邪魔でしょうから…」

太陽は一樹を見ながら、廊下に歩きだした。

廊下を進のは、天磨以外のメンバー。

天磨は一樹が眠る部屋に残り、一樹の横にずっと座っていた。

6：戻ってきた者

誰も喋らない中、先頭を歩く龍の足が、1つの部屋の前で止まった。

その部屋の中にみんなが座った。

真ん中にある太陽は口を開いた。

「彼は、俺と同じ中学の、『くらしきさつき倉敷皐月』です。」

彼は…まあちょっと一般人より霊力が高くてね…いろいろ手伝ってもらってるんだ。

今回のことは知ってたけど、まさか今日だったとは思わなくてね……

なんとか間に合ってよかったよ。」

笑顔の太陽。

瑠奈たちは、太陽の話を静かに聞いていた。

「姉さんは皐月に会ったことあるだろ？」

太陽の言葉に、瑠奈は首を縦に振った。

「姫さんこいつに会ったことあるん!？」

瑠奈が首を縦に振ったことに、啓太が驚きの声を上げた。

龍や祐輔も口にはださないが、真剣な表情で瑠奈を見ていた。

「えっ、えっど…」

3人の威圧感に負けないように、しどろもどろながら瑠奈は語りだした。

7：戻ってきた者

「1ヶ月前ぐらいかな、保健室で妖魔が襲ってきたでしょ。」

あの時私が助かったのは、彼のおかげなの。

私が妖魔に首を絞められていたとき、彼が助けてくれたの。」

瑠奈はあのときを思い出していた。

諦めないと思っていたが、心とは反対に力が及ばない。

だが、そんなとき助けてくれたのが、彼だった。

「…あれぐらい四季神が守れよ。」

黙っていた皐月が、突然口を開いた。

「おめえら四季神は、月姫を守るためにいるんだろ。

もし俺があの場合にいなかったら、おめえらの大事なお姫様…死んでたぞ。」

鋭い瞳は四季神の3人に向いている。

その言葉に1番早く反応したのは啓太だった。

「なんやと！？おめえ…」

「啓太！！やめろ！！！！」

皐月に殴り掛かろうとした啓太を止めたのは、龍だった。

「こいつが言ってることは正しい…あの時こいつがいなかったら…」

龍は最後のほうは言葉を濁した。

8：戻ってきた者

太陽は鋭い瞳を向け続ける皐月に言った。

「啓太さんもこいつ許してやってください。」

ちよつと口が悪いだけなんですよこいつ。

……ただ…皐月の言ってることは正しい…」

最初は柔らかい雰囲気だった太陽も、徐々に語調が固くなっていった。

「俺はあんたたち四季神を信用して、姉さんを任せただ…姉さんを傷つけるな。」

「太陽!!」

瑠奈は太陽の言葉を止めた。

「みんなはちゃんと守ってくれてる!!」

あれは私の力が足りなかったから…」

「来栖!!」

太陽に訂正する瑠奈の言葉を、今度は龍が止めた。

「俺らのことはいいから…」

心配そうな瞳を向ける瑠奈に、龍はいつもの笑顔を見せてくれた。

「2度と来栖を傷つけない…絶対に来栖を守る！」

龍は太陽やみんなの前で、そう誓った。

”絶対に来栖を守る！”

その言葉にまた胸が熱くなった。

1：始まりと終わり

—— 1週間後

「ほら、皐月も行くよ。」

なかなか桜の木から降りて来ない皐月を見て、太陽が声をかけた。

すると、しぶしぶ皐月は木から降りた。

「みんなが遅いから迎えにきたんだよ。」

さあ、秀一様が待ってるよ。」

そう言って太陽は歩いていった。

先頭に行く太陽の後ろを皐月がついていく。

「あの糞ガキ」

瑠奈のうしろでは、啓太がまだ怒っていた。

「どっちがガキだよ…」

瑠奈は隣を歩く祐輔のため息が聞こえた。

それからみんなで秀一の部屋に向かった。

秀一の後ろに座る、香林、香蘭、珠李。

そして天磨は壁に寄り掛かり、腕を組んで立っていた。

その向かい側に、瑠奈、龍、祐輔、啓太、太陽が座った。

皐月は端っこに座っている。

「よし、みんな揃ったのお。」

秀一は部屋を見渡して言った。

2：始まりと終わり

「実はの、太陽君と話しておったら、興味深い話を聞いてのお。」

感慨深げに話していた秀一が、視線を瑠奈に向けた。

「瑠奈様は記憶を取り戻すために、いろいろしておるそうですね。」

首を縦に降る瑠奈。

今だその成果は出ていないが。

「太陽君が言うには、瑠奈様の母上は、白鳳学園に通っていたそうです。」

「えっ……？」

「昔、母さんに聞いたことがあったんだ…ただ、白鳳学園って、いろいろ厳しいだろ。」

だから、秀一様に相談したんだ。」

驚く瑠奈に、太陽が説明してあげた。

「そこで、記憶を取り戻すために、白鳳学園に通うのが、1番良い方法かと思ひましてね。」

「…ってことは……」

祐輔が確信を得たのか、驚いた顔をした。

「瑠奈様…白鳳学園に転校してみてもはどうですか？」

「えっ…?」

驚く瑠奈をほつとき、啓太は1人大喜びだった。

「やった〜姫さんと白鳳に通うんや!!」

姫さん白鳳の制服絶対似合うで!

はよう見たい!!

あつ、星花の制服もめっちゃ可愛かったで!!!」

目をキラキラさせて話す啓太。

「啓太、黙ってる。」

祐輔の鉄拳で、啓太は部屋の隅で動かなくなった。

3…始まりと終わり

「どうですか？

瑠奈様…母上がいた白鳳学園なら、母上の気配に、少しは触れることが出来るかもしれません。」

——…記憶を取り戻す可能性は、白鳳学園のほうが強い。

「…私…白鳳学園に通います！」

瑠奈は宣言した。

これが新たな舞台の幕開けだった。

「桜井君…」

自分の部屋に帰った瑠奈は、廊下から月を眺めていた。

すると1つの気配が近づいてくる。

そこに顔を向けると、龍の姿があった。

「どうしたんだ…?」

龍の言葉を聞きながら、月を眺める瑠奈。

「月見てるんだよ。」

瑠奈は明るい声で言った。

「不安なのか？」

龍の言葉に、ビクッと肩を揺らす瑠奈。

4：始まりと終わり

龍は瑠奈の元まで歩いて来て、抱きしめた。

「大丈夫…大丈夫だから…」

龍は瑠奈の頭を優しく撫でた。

すると瑠奈はその暖かさに、泣き出してしまった。

龍の胸の中で泣き出す瑠奈。

龍は何も言わず、優しく抱きしめ、ただ頭を撫でるだけだった。

龍の胸元の服を握りしめ、瑠奈は話し出した。

「私っ、不安なの…白鳳学園で、お母さんのこと思い出せるのか…
…自分は本当に、みんなを守るのか…」

瑠奈は心の内をさらけ出した。

「3ヶ月前まで、普通の女子高生だった私に、本当にできるのかな
…私なんかが、みんなに守ってもらう資格なんて、あるのかな…」

「言っただろ。」

頭を撫でていた手を止めて、瑠奈を抱きしめる腕をといた。

そして、瑠奈の瞳を見つめた。

「俺が…俺が瑠奈を守る！」

初めて名前を呼ばれた。

そして守るという言葉。

すべてに胸が高鳴った。

5：始まりと終わり

「不安があるなら、俺に言え。」

泣きたいなら、俺が抱きしめてやる。

だから… 1人で脅えるな。

俺が瑠奈を守るから…」

また龍は瑠奈を抱きしめた。

その力はさっきよりも強い。

「ありがとう…龍…」

瑠奈も龍の名を呼び、背中にゆっくりと腕を回した。

2人の姿が、月明かりに照らされていた。

……寒い。

目が覚めて肌寒さを感じた瑠奈は、布団から出たくないという気持ちを我慢して起き上がった。

あの恐ろしい日から三か月近く時がたつが、時々夢に見るあの光景が、今でも恐ろしくてたまらない。

男の後ろに光る円く大きな月。

その光に照らされて輝く刀と、男の妖艶な口元。

その刀が自分のもとに振り下ろされる。

そして、現れた学ラン姿の少年。

今でも目を閉じれば、その光景が目の前で起こっているように感じて怖くなった瑠奈

6：始まりと終わり

「瑠奈：中に入りなよ。風邪ひくよ。」

ふわりと肩に上着をかけられた。

「ありがとう、龍。」

瑠奈は龍にかけてもらった上着を、肩から落ちないように端を握りしめた。

「また夢を見たのか？」

龍は心配そうに瑠奈を見つめていた。

「大丈夫。」

もう慣れたから。

それに龍もいるしね。」

瑠奈はそう言っで龍に笑顔を向けた。

龍はそんな瑠奈の笑顔に苦しそうな顔をした。

「龍……そんな顔しないで。

あたしは大丈夫だから。

だって…龍が守ってくれるんですよ。」

瑠奈は照れながらも、龍を見つめて言った。

そんな瑠奈の言葉に一瞬目を見開いた龍だが、すぐに

「…ああ。」

と言って瑠奈の頭を優しく撫でた。

「瑠奈は俺が守る、」

「あゝあ、やっぱり一樹は使えなかったね。」

「あいつは、心が優しすぎる。」

今さら捨てたことに後悔などない。」

暗闇に少女と男がいる。

嘲笑い、怪しい雰囲気。

「やはりお前しかないな…なあ、一磨。」

「…はい。」

その男の足元には、ひざまずく一磨がいた。

——物語はまだ始まったばかり…

6：始まりと終わり（後書き）

『月ノ姫』眠れる記憶を呼び戻せ』 完結しました。

しかし！！月ノ姫シリーズはまだまだ続きます。

月ノ姫の第2シリーズも始まります。

次の舞台は、白鳳学園。

新キャラも登場して、ますます面白くなっていきます。

第2シリーズもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4820i/>

月ノ姫～眠れる記憶を呼び戻せ～

2010年10月21日22時22分発行